
幻想郷の狼と馬鹿な世界の超能力者

雪月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷の狼と馬鹿な世界の超能力者

【Nコード】

N3990W

【作者名】

雪月

【あらすじ】

1000年周期で出来る時空の歪みと呼ばれる穴に落ちた文月学園2年Fクラス『音橋絵里』。そこには狼と人間の半獣である『白』という少女がいた。絵里は急遽頼まれたレイの仕事により、幻想郷を巡ることに……？
本当にいきなり組まれたコラボ作品。

はじめり（前書き）

この作品はLigger様著『妖怪の山の半獣』と、私雪月が書いている『バカとテストと召喚獣』転生しても変わらない』のクロスオーバーです。

はじまり

時空の歪みと呼ばれる物が存在します。

レイ曰く、それは別の世界に繋がっているので別世界にいけることでした。

でも、もしも運が悪かったなら。

原型を留めないまま、ただの肉片として時空の歪みと狭間を彷徨う事になる。

っていう話でしたけど……

「まさか家に歪みがあるなんて思わないでしょう……」

そう。空間の歪みができる場所はランダム。

100年周期で出来る歪みにはまる人は少ないと聞いていましたが

……

……って、そんな物に私ははまっただけでしたね……

180度どこを見渡しても森ですね……傾斜があるところを見ると、恐らく山……？

いえ、よく考えてみると別世界に繋がっているって言うてましたし……もしかしたら妖怪とか出て来たり何かするんでしょうか？ だ

としたらカニバリズム的行為も……？ うう……そんなの断じてお断りしたいですよ……

ガサガサ…… 草むらが揺れる音

……バッドタイミング……

さて……蛇が出るか鬼が出るか……

バツ 獣耳の少女登場

「「……………ん？」」

目が合う。

耳と尻尾が何故か3本あって、毛は銀色がかった白で見るからにふさふさそうです。

瞳の色は透き通るような青で、どこか狼を彷彿させます。
身長は私よりも少し低い……ですかね？

「えーっと……」

「？」
「もしかして、外来人の方ですか？」

……もしかして事情を知っている？
だとすれば此処は陰陽や世界について詳しいのでしょうか。

「はい。恐らくそうなると思います」

「やっぱりそうですか……」

「つかぬ事をおたずねしますが、此処は……？」

「あ、此処は っ、ここじゃ少しまずいので私の家に来て下さ

い
「え？」

一瞬にして狼となったその子に私は乗せられます。
少しの衝撃がしたかと思うと、次の瞬間には走り出していました。
木々が避けていくように見えるとはよく言った物ですね……

「がおっ（降りて下さい）」
「あ、はい」

なんとなく意志通事が出来たことに驚きつつも背中から降りると、
狼からまた獣人へと戻っていく少女。

「あの……此処は一体」
「此処は幻想郷です。忘れられた物や幻想が集う郷です！」

そう言っただけで笑いながら言う少女に私は可愛いなど思いつつもその子
に笑顔を向けます。

「幻想郷、理解しました。申し遅れましたが私の名前は音橋絵里と
言います。絵里で構いません。因みに超能力者です」

「あ、こちらこそ申し遅れました。私は白と言います。白で構いま
せん。因みに半妖です」

……

「「え？」」

半妖……？

いやいやいや、まさかとは思っていましたが本当に妖怪が出るん

ですか？ いや、落ち着かせて下さい。私は常に……いえ、たまに取り乱しますけど結構冷静な方です。

「あの、半妖って……」

「ここ幻想郷は人間や妖怪などが共存できる唯一の場です。狼の妖怪と人間の血をひいているんです」

「ああ……分かりました」

つまり妖怪と人間のサラブレッドというワケですね。

まあ、妖怪如きでそんなに驚きはしませんが…… 慣れ

……うん？ 何か変な物が着いた感じがしますね……まあ分からないのであくまで勘ですが。

「あの……超能力者って……」

「えっと、そのままの意味です」

「へー……じゃあ絵里さんも能力持ちなんですか？」

「？ どういう事ですか？」

「幻想郷では珍しくないことなんですけど、みんな能力を持っています。私なら『あらゆる動物と会話できる程度の能力』と『相手の能力を無効化する程度の能力』とかですね」

へえ……つまり、生まれつき持った体質みたいな物でしょうね。

例えるなら絶対音感とか、そういう類の物。

「能力持ちなら分かりませんが……取りあえず博麗神社に行ってみましょう」

「博麗神社？」

「はい。外と此処を繋ぐ……ああ、話していませんでしたけど、幻想郷は外と此処を博麗大结界という结界で切り離しています。その

結界を管理しているのが博麗神社です」

外……でも、あまり意味はないでしょうね……

「また私が狼になり」

「その必要はありませんよ」

「ふえ？」

少し抜けた顔を見せる白さんに、私はまた笑顔を向けた。

「テレポートしましょう」

白さんの手を掴み、空間を把握していきます。

確かにと東の方に幻想郷を守っている結界の中心と思われる境目が見えます。

その外は………どうやら森みたいですね。

で、その神社を探し出していきます。

神社と思われる2つの建物。

恐らく中心により近いところでしょう。とすれば、此处ですね。

「テレポート！」

私は久しぶりに使うその技の名前を読み上げました。

すると次の瞬間にはもう博麗神社についており、鳥居の上にはしっかりと博麗神社と刻まれていました。

「……成功、みたいですね。結界という事で結構覚悟してたんですけど……」

「す、すごい……」

「ん？ 白……と見慣れない奴」

「あ、霊夢さん」

振り返るとそこには紅白が印象的な巫女服を着た人が。
ただ何処か西洋的で、何故か腋を出していますが。

「白、そっちは？」

「外来人です。音橋絵里さんと言います」

「音橋絵里です」

ぺこりと頭を下げる。

……しかし、この顔何処かで見たとような……

「ふーん……じゃあさっさと戻すわよ」

「あ、ちよつと待　　」

その時だった。

「「見つけたアアアアアツツ！！！！！！！！！！」

「へ？」

不意に身体に強い衝撃が走ったかと思うと、一瞬にして木に叩きつけられていて……

「げほっ……」

「「何事ッ！？」

「絵里！ やつと見つけたわよッ！」

私に覆い被さる2つの影。

それはまさしく私の最悪の元と呼んでも過言ではない……………

「美穂！？ 真由子！？」

「絵里だ！ 生絵里だよ、美穂！」

「真由子！ やったわね！」

な、何が…………取りあえず。

ポケットの中を密かに漁り、それを美穂と真由子の身体に当てる。

バチバチィッ！ スタンガン

「（ドサッ）」

「はぁ、はぁ…………」

「え、絵里？ そ、其奴らは…………？」

「ストーカーです」

「ストーカー！？」

つ…………久々過ぎて余計なダメージを…………

「だ、大丈夫ですか？」

「白さん、ありがとうございます…………」

「……………」

な、何でしょうか…………霊夢さんの視線が痛い…………？

「でも何でこの2人がこんな所に…………」

「そう言えば結界を超えてきた3つの反応があったわね…………」

「美穂と真由子は多分意地ですね。残りの1つは…………」

「私よ」

声が聞こえた方向を見る。

そこには私の妹であるレイの姿がありました。

「レイ。この2人はミスセレクトですね」

「実弾撃たれそうになったのよ。流石に天使とかでも復活できないわ」

確かに0距離とかだったら避けられませんね。実弾。

「何かすごい勢いで又那川兄妹が迫ってきたんだけど」

「龍君と柳奈が？ 大方刀でも持って来たんでしょう？」

「因みに吉井君は島田さんと姫路さんに折檻されて、坂本君は霧島さんにアイアンクローをかけられて、土屋君は血の海に沈んでいたわよ？ 木下君は救護で大忙しかったわ」

成る程。

「FFF団の様子は？」

「暴走状態。トモが何とか抑えてるわ。あと西村先生が暴拳を行って」

「それなら安心ですね」

「聞いてる限り安心できる単語が1つもない……！？」

ああ。この2人はあの惨劇を知らないんですかね。

「まあ、私達の日常は非日常なんですよ……多分」

「そうね。まああの程度で死ぬような人達じゃないわ……多分」

「ほ、本当に大丈夫なの？」

「そうですね……まあ、私達の仲間は何度も三途の川を渡りかけてますし……まあ若干渡って戻ってきた人もいますけど」
「確か前世での罪を懺悔し始めた時もあったわね……」

ああ、合宿の時ですか。

まあ結果としては蘇生できましたし。

「ま、まあ気にしないことにしておくわ……白、こっぴつ人達と関わり持つちゃ駄目よ？」

「え？ で、でも……」

「誤解しないで下さい。私達はまだ常識を持ち合わせていますよ……ただ、私達の存在が常識と言えるわけではありませんが」

「？ どういう意味？」

……言うべきか、言わざるべきか……まあ言わないことにしましょう。
う。

ニコニコと笑っておく。

まあ笑って誤魔化すってやつですね。

「……まあ良いわ」

「それじゃあレイ、帰りましょう」

「あ、無理」

……

「え？」

「時空の歪みが出るのはあと一回。神様が何とかしてくれるみたいだけど……あと1週間は必要ね」

はああああ……

「あの馬神ですか？」

「あの馬神です」

「神様の事をそんな風に呼んで良いんですか……」

「いえ、アレはとことん馬神です。人を暇つぶしで殺すほどに馬神なんですよ」

「……絵里」

「……大丈夫ですよ。まだ殺る気はありませんから」

「あれ……？」

字は間違ってますよ。

「それじゃあ暇な分観光してくれば良いじゃないですか？」

「白!？」

「観光……何処が見る場所があるんですか？」

「いっぱいありますよ」

どうせ一週間で潰れるんでしょうし……

「レイ、どうします?」

「別に良いんじゃない? 行ってきなさいよ」

「? レイは?」

「仕事……って呼ぶのかしら? こっちにはこっちの彼岸があるのよ。あの馬神は馬神でも一応私のクソ上司なのよ。上は上。下は下。割り切るしかないわね……それに彼岸ってすごく落ち着かない?」

「……ううん。全然」

「えー。人は誰しも遅かれ速かれ行く場所なのにー」

ブツブツ言いながら私に通信機を渡して飛んでいくレイ。

……ええ!?! 何やってるんですか!?!

“……………”

「？」

思念波……？

サイコメトリー……

“……………”

「……成る程……」

「？　どうかしたんですか？」

「レイから仕事の一端を頼まれました……1週間で幻想郷の位置関係及び有力な場所の目星を付けて欲しいとの事です」

「幻想郷の有力な場所……」

「それだったら私が案内しますよ。大体なら動物を伝って分かりますから」

「案内お願いしても良いですか？」

「はい。任せて下さい！」

あ。そうだ。

「因みに理由を聞いても？」

「同類の匂いがします」

「……白さんとは仲良く慣れそうですね」

「……そうですね。私も絵里さんだったら仲良く慣れそうな気がします」

そんなこんなで私は白さんに案内されて幻想郷ツアーに出掛けることとなりました。

……って、続くんですかッ!?

はじまり（後書き）

始めました、本作品『幻想郷の狼と馬鹿な世界の超能力者』です！
投稿させて頂きます、首謀者の雪月です。

では絵里の問に対しての答えです。

続いちゃいます。

感想やご指摘等がありましたらどぞドシドシ宜しくお願い致します！

大賢者のつぼと天魔と悟り妖怪

【幻想郷に行く予定の場所

博麗神社…

魔法の森

紅魔館

白玉楼

人里

永遠亭

妖怪の山

太陽の畑

彼岸

最高裁判所

地底（地霊殿も含む）

天界

八雲亭

尚、生死は問われないのでそこは要注意すること】

「……此処全部ですか？」

「はい。大体その辺が大きな勢力とிட்டた所ですね」

「そうですか……じゃあ白さん、急いでいきましょうか」

「どこから行きますか？」

「それじゃあ八雲亭辺りから行きましょう。何か重要そうな感じが

します」

メモ用紙をじーっと見つめながら私は白さんに言います。
結構八雲亭の文字が震えているんですけど……

「あー……それなら当主を呼びますね」

「？ どうやって呼ぶんですか？」

幻想郷には電話は普及されていないはず。

それを瞬時に呼ぶ事は不可能なはずですが……

白さんは数回深呼吸を繰り返すと俯いて静かに口を開きました。

「ゆ、紫」

「呼んだ？」

「ひゃうっ!?!？」

後ろから現れた何か。

私は即座に振り向いてその影を視界に捉え、絶句してしまっ。

そこには“空間の亀裂”から這い出てきた金髪の女性がいて……

「……………」

やっぱりこの人も何処かで見たとような気が……

「白、その子は？」

「外来人の音橋絵里さんです」

「えっと、音橋絵里です」

「へえ……………」

じーっと観察するような目で見られる。
うう……やっぱりこつこつという視線は苦手ですね……

「で？ あなたは何で白と一緒にいるのかしら？」

「私が案内してるからです、紫さん」

「白、何やってるの……さっさとそいつを戻して私と一緒に来なさい」

「仕事を頼まれているから無理だそうですよ。1週間だけです」

「それにただ外というだけではありませんからね」

カチャッと耳元に通信機を付ける。

ザザツ……

「レイ、応答願います」

“はい、こちらレイ。何か用？”

「主要人物に会いましたよ。どうすれば良いんですか？」

“適当にサインとか貰っておいて。能力とかも聞いておくのよ？”

「ラジャー。つまり」

“？”

「煉獄帳を作れ、と」

“……ま、まあその辺は任せるわ”

「了解です」

ピッ……

幸いなことに鞆を持っておいた事ですし……

ノートとペンを取り出してスラスラと一応メモしておく。

「レイも面白いことをしてくれませぬ」

「何か煉獄とか聞き捨てならない単語が聞こえたんだけど……」

「煉獄帳のことですか？　なら気にしなくて良いですよ」

「れんごくちよう……？」

「はい。煉獄帳は人の個人情報及び過去を詳しく調べ、トラウマを記載………何でもないです」

「殆ど語ってる！　途中で止めても殆ど語ってるわよ！？」

おっと。私としたことが……

「まあまあ。気にしない方が特ですよ？　気にしたら………そうですね。私の煉獄帳に記載されている人達総勢………何人でしたっけ………まあ、その人達に呪われますよ？」

「ま、まあ良いわ………私は八雲紫。妖怪よ。あなたは何者？　人間よね？」

「えーっと………超能力者です」

「………ん？」

取りあえずにこやかに笑顔を作っておく。

「は？　超能力？　え？」

「まあまあ。所で早速紫さん情報が入ってきたんですけど」

「どこから！？」

「ペンネーム、冥界の姫さんから」

「幽々子………」

「『紫は実は見た目とかけ離れて何千年も生きてるのよ』らしいんですけど、実際何年生きてるんですか？」

………黙秘、ですか？

「でも紫さんって見た目私と同じくらいなので17歳くらいにしか見えませんよね」

「え？」

「だって結構美人ですし。私の先輩に木暮先輩っているんですけど、その人よりも若く見えますよ？」

木暮先輩は無駄なところで大人っぽいし、逆に……20代に見える気がします。

年齢偽ってませんよね……？

「……………絵里」

「はい」

「私について詳しく書いておいたわ。何かあったらこの笛をならしなさい。すぐに飛んでくるわ」

「は、はい……………」

「それじゃあ頑張りなさいよ」

そう言っただけでまた亀裂に戻っていった紫さん。

「流石絵里さん。紫さんのつばを心得てますね」

「？ つば？」

「（無意識…………）」

何のことでしょうか…………まあ情報が入っただけでも良いことにしましょう。

八雲亭制覇…………っど。

紙には何か式神のこととかについても書いてありますね…………まあこれも記載しておきますか。

「次は……無難に私の身近な妖怪の山に行きましようか？」
「宜しく願います」
「はいっ！」

白 side

唐突に始まった今回の旅。

いつもなら面倒だとか、そう思うんだけど……

「白さん？ どうかしましたか？」
「あ、いえ」

……絵里さんだと、何でこんなに落ち着くんだろ。

「それじゃあ行きましようか」
「はい！」

ま、いつか。

絵里 side

煉獄帳に記入していくのは至って普通のことばかりで、予想以上につまらないですね……

まあ仕事の一環ですし、些か仕方ありませんか。

「妖怪の山は基本的に天狗です」

「天狗がいるんですか」

「はい。天狗にもランクがあります。妖怪の山を警備する哨戒天狗とか、鴉天狗とかですね」

「縦社会……ボスに会えるんでしょうか」

「スペルカードを作ってから行った方が良いでしょうね」

「大丈夫です。貰ってありますから」

「紫さんにはですか？ 用意周到ですね」

「全くです」

スペルカードを眺めます。

既にしておきましたか………こんなので良いんでしょうか？

「それでは行きましょうか」

「あー……頑張ってください」

「はい。白さんはちゃんと此処で待っていて下さいね？」

「ちゃんと生きて帰って来て下さいね」

「任せて下さい」

私はそう言っ第一派を放ちます。

「サイコウエーブ」

念動力で風を操り、鎌鼬を作り上げていく。
そして出来上がったそれを山に向けて放つ。

ドツツゴオオオオオンツ！！ 山が抉れる音

「やりすぎでしたが……場所は既に把握済みです！」
「本当に気を付けて下さいね!？」

念動力を使い宙に浮かびます。
少し眠くなりますが……仕方ありません。

数分後 - - - - -

「ゼー……はー……ゼー……はー……」
「だから、お願い、ですから、取材、を……」
「山決つておいてそれはないだろう!？」
「欲しい物、何でも上げちゃいますよ？」
「交渉成立だ」

ガシッと握手を交わします。
現在スペルカードで私が戦っていた相手こそ天魔らしいです。

「……天魔、弥だ」

「……音橋、絵里です」

「……酒、宜しく」

「……最高品質のを樽で500用意しましょう」

通信機の電源を入れます。

「こちらE、Rは応答せよ」

“こちらR。E、どうかした？”

「次元を繋ぎます……許可を」

“許す”

「軽！？ まあ良いです……それじゃあやりますねー」

“健闘を祈る（笑）”

「何自分で（笑）とか言ってるんですか……」

カチッ

電源を切ってから時空を歪め……

四次元ポケット擬きを作り、私の家に繋がります。

「トモちゃんー!!」

『絵里！？ どうしたの！？』

「留守を頼みます。それとお酒を樽で500頼みます」

『何があったの？ とにかくウチの酒蔵から全部持ってけば？
一般人が納得する程度なら500はあるし』
—

「では本日はありがとうございました」

「ああ。いつでも来な。絵里だったら大歓迎だ」

「あやややや。大スクープになりそうですね！」

「文様待って下さい！」

「文に何て負けてられないんだから……！！！」

因みに上から私・天魔・文・椀・はたての順番です。

あの後取材に来たんですね……私の。

「さて……白さん、次に行きましょうか」

「大丈夫ですか？」

「はつきり言って辛いので白の好きなところに連れて行ってくれますか……？」

「はい。それじゃあ着いたら起こしますね」

「お願いします……」

眠りについた。

白side

「すう……」

年相応の寝息を立てる絵里さん。

この暖かみは嫌いじゃないと思いつつ私は穴に飛び降りる。

そつと着地すると、そこにはいつも通り水橋パルスイさんがいた。

「ん？ 白じゃない。誰？ その子」

狼から獣人モードに切り替えて絵里さんを起こす。

「起きて下さい」

「……………つきましたか？」

「はい」

何か可愛いな……………こういう人を美人って言うんだろう。

「何よ、仲良さげに……………妬ましいわね」

「絵里さん。此処が地底です」

私はにこやかに告げた。

すると絵里さんは苦笑しつつも、ありがとございますと呟いてパルスイさんに向き直る。

「初めまして……………えっと、音橋絵里です？」

「何で疑問符が付いてるのよ……………」

「パルスイさんっていうですかー？ 可愛いですねー」

「かわつ……………!？」

「友達になりましょー。ハグですー……………」

「ふえ!？ あ、あの……………っ!？ は、白! 何とかして! お願
いしますッ!」

「へ!？ あ、はいっ!」

敬語……………?

疑問に思いつつも絵里さんを離す。

暫くしてぼーっとしていた後に、はっと我に返った顔をした。

「す、すいません……寝ぼけてました」

「ね、寝ぼけて……」

「寝起きって、私誰彼構わずに抱きついたりする癖があるんです……す、すいません／＼／＼／＼」

顔を真つ赤に染める絵里さんは本当に可愛かった。

絵里 side

.

うううう……やっちゃいました……

「は、速く行きなさいよ……妬ましいわね」

「……白さん、行きましょう」

「え？ でも……」

「良いんですよ。大丈夫です。ただ少し先を歩いてくれませんか？」

「はあ……」

疑いながらも前を向いて少し先を歩き始める白さん。

……よし。

「パルスイさん、これあげますね」

「は？」

「友達の証しです」

「なっ……………!？」

「あと本当のことが言えないって考えてるみたいですけど、ちゃんと皆さん分かってますよ？」

「……………速く行きなさい」

「はい。ありがとうございます」

たつと私は白さんに向かって走る。

「……………ありがとう」

後ろから微かに聞こえてきた声につい頬が揺るむものの、私は走ることを止めなかった。

歩いて数分後。

地下街の様な場所を抜け、見えてきたのは地霊殿と呼ばれる建物でした。

「ここには悟り妖怪がいます。あとはペットとかですね」

「ふむふむ……………」

煉獄帳……………いえ、これはもう情報だけですし……………そうですね。

“幻想書”なんて良いですね。

幻想書に書き込んで行きます。

今までにあった妖怪の写真付きで。

それだけが私の特技ですしね。悲しいこと。

「それじゃあ情報だけ集めて帰りますか……」

「あ、それは無」

「白だー！」

「きゃんっ！？」

「白さん！？」

この人は……？

白さんに抱きついていたのは黒い帽子を被った女の子です。

……無意識、領域……

不意にそんな言葉が頭を過ぎります。

「あれ？ 誰ー？」

「……白さんの友人です。音橋絵里と言います」

「私は古明地こいしだよ。よろしくね」

「宜しく願います」

「た、助け……」

「こいしさん、失礼しますね」

「ふえ？」

白さんの上からどかせて安全な土の上にテレポートさせます。

全く……

「白さんも大変ですね……」

「助かりました……」

「何今の！ もう1回！」

「あー……はい」

此処は従っていた方が良いと何故か身体の一部が反応します。

な、何ですかこの感覚は……会った人全てに反応してますよ！？

まさかこんな所で翔子ちゃんや瑞希、美波以上の本能が叫ぶ人並の人達がいたとは……

つまり、殺気などだけなら翔子ちゃんにも匹敵……更に殺傷能力も

……

……考えたく、ありませんね……

「こいし様！ やっと見つけ 白！ と、誰？」

「友達です」

「あ、納得。って、そうじゃなくて……白、さとり様に会っていった方が良いよ？ アタイは暫く外すけど」

「誰ですか？」

「火焰猫燐っていって、私のお姉ちゃんのペットだよ。死体を集めるんだ」

「ほう……」

確かに猫耳がありますね。

しかもゴスロリとききましたか。やれやれ。私は至って普通のパーカーとスカートにTシャツは白だというのに。完全に部屋着ですが、まあ気にしない気にしない。

……うん？ 死体？

「因みにもう1人いて霊鳥路空ってというのがいるんだけど、地獄鴉
with 八咫鳥なんだ」

「八咫鳥というと日本神話で神武東征の際に高皇産霊尊によって神
武天皇の元に遣わされ、熊野国から大和国への道案内をしたとされ
る鳥の事ですね。一般的に三本足のカラスとして知られており、古
くよりその姿絵が伝わっていると聞いたことがあります」

「へー」

中国の火鳥（金鳥）と同一視されたり、太陽の象徴とされることが
多いんですけどね。

熊野信仰において鎮められた死霊が成ると言われているミサキ神と
の関係が指摘されており、熊野三山では八咫鳥がミサキ神として信
仰されていますが……まさか同一人物ではありませんよね。

それに確か地獄の鳥は鉄の体と燃え盛る嘴を持ち、地獄の中的一切
の罪人の身・皮・脂肉・骨髄を皆食らい、亡者に大苦悩を与える
というアレですか？ ネパールなどでは、鴉は『地獄に住む閻魔大王
の使者』であると信じられていますか……

「そう言えば地底は旧地獄でしたね……」

「うん、そうだよ」

可能性は充分にありますか……

「核融合を使うんだよ、お空は」

「核融合、ですか？ それは危険ですね……自然のバランスを崩す
可能性も……その部分を考慮すると結構な確率で危ないですね」

まさにシュレディンガーの猫箱と熱かい悩む神の火と言ったところ
でしょう。

シユレディンガーの猫箱。

はたして猫は死んでいるのか生きているのか。亡骸を集めるのは仲間を増やしたいからか、はたまた別の意味があるのか。

扱いは元々熱かいですし。

それに八咫鳥は神として信仰されているのですから。

「残念ですけど、さとりさんには会えませぬね」

「え？ どうしてですか？」

「時間がおしてます。これ、一応仕事ですし……写真は既に納めました」

「いつの間に!?!」

小型潜入カメラです。

「これは本当に便利ですよ？」

「小さい……なんか天狗にあげたら喜びそうだね……」

「高性能ですよ？ ただ難点なのが操作の方法ですね。少し難しいです」

流石に定理を覆しちゃったのはまずいと思いましたが。

「つと、これ位にして本当に行きましょう」

「あ、はい！（ありがとございます）」

「（面倒事になりそうな心配がしていましたから。困ったときはお互い様です）」

アイコンタクトをしてから、私達は逃げるように地上へと戻っていききました。

- - - - -

「ぐっ！」

「絵里、絵里……」

「お前ら本当に人間か!？」

「失礼な!？」

「鬼に勝ってる奴の言う台詞じゃないと思うんだが!？」

「私達はただ愛しの人のために修羅となった普通の女の子だよ？」

「修羅って言ったぞ!？ 誰かコイツら止めてくれッ!!!」

美穂と真由子は鬼と戦っていた。

理由は至って簡単。

レイが面倒だった。ただそれだけだった。

「戦う相手には苦勞しないんだが……」

「勇儀さんも諦め悪いなあ」

「真由子、落ち着いて、もう一度、殺s　本気で行きましょう」

「オイオイ、殺されかねないぞ……」

鬼が少し本気で嘆いた瞬間だった。

大賢者のつぼと天魔と悟り妖怪（後書き）

一気に詰め込み過ぎちゃいましたね（汗）

森と魔女と必殺料理人

魔法の森。

大体幻想郷で森といったら此処、という程らしい。

幻覚作用のある茸が生え、その幻覚が魔法使いの魔力を高めるということでこの森に住む魔法使いも多いとのこと。キノコが自生するとだけあり、原生林の森で薄暗くじめじめしているので、キノコの胞子で体調を崩してしまう場合もあるという。妖怪もあまり足を踏み入れない。

との情報を得て来た此処、魔法の森です。

「私も流石に魔法の森は初体験ですよ……？」

「大丈夫ですよ。いざとなれば博麗神社からやり直せます」

「大丈夫ですかね……」

軽く空を飛びながら散策していきます。

途中不思議なキノコを見つけては鞆の中に放り込み、次第に鞆が一杯になつてきた頃。

「白じゃないか」

「？ 魔理沙さん？」

「ああ。隣は誰なんだぜ？」

唐突に空から現れたのは黒白の魔女。

箒に跨り、いかにも魔女ですと自己主張しているようなその姿。

金髪に金色の目とはまた珍しいですね。

「どうも始めまして。音橋絵里と言います」

「霧雨魔理沙だぜ。普通の魔法使いだ」

「魔法使いですか。私は超能力者です」

「超能力？ って事はアレか。噂の」

「「噂？」」

な、何ですか……？

「ああ。妖怪の山で天魔と互角の戦いを見せたって噂になってるぜ？」

「天魔さんですか……アレは、そのですね……」

ついで………

「と、兎も角です！ 魔理沙さん、魔法の森に住んでいる住人とその人の名前・性別・年齢・身長・体重その他諸々を教えてくださいませよ！」

「面白い！ それじゃあ弾幕ごっこだぜ！」

「望むところですッ！」

私と魔理沙さんは空を飛ぶ。

………え？ 震えてる？

気のせいじゃないですか？

いえいえ、決して私は高所恐怖症だとかそう言うのではなくてですね？

ただ昔にちょこつと高度8910メートルから落とされただけですよ？ たったの30メートル分しか飛べないだけですよ？ べ、別

に怖くないんです！ 戦いですっかり忘れていていつつもそれだけの高さを飛んでいるとか、見栄を張って超能力で自分自身に幻を見せて空を飛んだとか、そう言うのじゃ無いんですよッ！？

「……………」

ふと気付けば気が重くなっていて、ネガティブ空間が発生しているようでした。

幼き日よりつもりに積もったこの負の感情が今になって溢れようとしています。

「大丈夫大丈夫。私はもう少しだけ大丈夫大丈夫大丈夫……」
「何だ、来ないのか？ それなら私から行くぜ！ 魔符『スターダストレヴァリエ』！」

ぷっちん

ナニカが切れたような音がした。

魔理沙 s i d e

絵里の周りに黒い影がまとわりつき、私の弾幕をガードする。

「そんなのつて有りなんだぜ!？」
「大体前世から周りの人達は私の話を聞かないし自分のことばっかりで迷惑かけさせるし挙げ句の果てに死因が暇つぶしって……………」
冗談じゃない」

ゴオツ!!

息を呑む。

霊夢の殺気どころじゃない。

アレだ。

例えるなら霊夢がすっごく満面の笑みで異変の首謀者の所に行くほどだ。

「覚悟は、出来てますか？」

につこり。

そんな擬音が着くかの如く、絵里は微笑んだ。

異性だけでなく同性まで魅了するその笑み。一瞬頬が赤く染まった気がするが問題はないはず何だぜ!？」

「い、いや……………待て、絵里……………」

「遺言だけ聞きましょう」

「分かった、怒りを静めるんだ。うってつけのMがいるから」

ふしゅるるる…………… 絵里の殺気が小さくなる音

「それで、その人はどこにいるんですか? (につこり)」

「ちよつと落ち着け。まずはアリスの所に連れて行ってやる。私の負けだからな」

さっさと用事を済ませて天子を紹介してやろう。
そう思っつて私は箒に跨る。

「あれ？ 魔理沙？」

「天子……」

つくづく良かったな、絵里。

「コイツだ。M」

「は？ 何よそれ」

「思いつきり痛いコトさせてくれるぜ？」

「アンタ誰よバーカ！」

いきなりの罵倒に絵里が凄い笑みになる。

「歯を食いしばって起きなさい」

「はあはあ……！」

(い、今ありのままに起こったことを話すぜ。SMだとか、プレイだとか、そんな生半可なもんじゃない。アレはそう……まぢっ(ry)

絵里 side

「スッキリしました……」

「もうらめえええ……」

「絵里さんが戻ってきて嬉し……」

まだ若干の違和感が残る物の、私達はアリスさんと言う人の所に行きます。

何でも魔法使いの端くれで、人形遣いなのだとか。

「此処がそうだけ」

「白い洋館ですね……」

「アリスさんの家初めてですね……」

「アリスウウ!!!!!!」

箒流星飛び膝蹴り。

名付けるのならそんな感じですか。

魔理沙さんがいきなり扉を強引に開いて中に侵入していきます。

さながら強盗の如く。

「魔理沙……人の家の扉を破壊しないで頂戴」

「今日は急用だったんだぜ」

「何よ？」

「白ともう1人の面白い奴がアリスに会いたって言うから連れてきたんだ」

「ふにゃっ!?!」

「ぜ？」

声だけが聞こえ暗転する世界。

ナニカが顔にぶつかった衝撃を始めとし、次々に何かがまとわりつく感じが全身を取り巻きます。

漸く衝撃が消えた頃、始めに顔にぶつかってきた物が動き、視界が開きます。

そこには啞然とした金髪に碧眼の、まるで人形のような女の人がいきました。

ついでに自分の身体を確認。

そこには人形が沢山ワラワラと動いていて……………

「っていつか……………重い……………」

へなへな……………

塵も積もれば山となる。

1体が500グラム換算でも大凡30体ひっついてるので1.5?。

更に装備品(武具類・防具類)を含めると10?は軽く行くでしょう。

大きさも違いますし。

「い、今取るわ」

「動かないで下さいね」

「大丈夫かー？」

座った状態でも尚くつついてくる人形を1匹……………いえ、1体ですね。

ともかく1体を手に取ります。
精巧な作りに可愛らしい洋服。まるでお母さんが持っていた人形みたいですね。

「……………ただしお母さんの人形は毎晩毎晩髪が伸び続け拳げ句の果てには呪い殺そうとしてきますが。」

「それにしてもこの子供が人間を気に入るなんて……………久々に見たわ」「絵里さん、大丈夫ですか？」

「呪われた訳じゃありませんから大丈夫です」

「ウチの人形は呪わないわよ」

ウチの人形は呪うんですよ。

「アリスの事なら本人に聞いた方が早いだろ」

「それじゃあ少し取材をお願いします。あ、簡単にで良いので」

「え、ええ……………」

【新しく“霧雨魔理沙”が幻想帳に登録されました】

【新しく“アリス・マーガトロイド”が幻想帳に登録されました】

「変なテロップが流れた気が……………」

「？　どうかしたの？」

「いえ……………ありがとうございました」

色々聞き終わり、私はアリスさんの淹れてくれた紅茶を飲みます。

「……………薬品の味がしない……………!??」

「普通はしないわよ!??」

「いつもは睡眠薬・痺れ薬・眠り薬・その他諸々が混雑している物が多々あり 何でもありません」

「聞いている限り何でもなくなさそうだな!？」

「いえいえ、別に友達の淹れるコーヒーが一口で彼岸をみれるくらい凄まじい とっても美味しいです」

「コーヒー一口で彼岸!？」

「あはははは。そんな事あるわけ無いじゃないですか」
「目を見て言ってみろ」

ついで…………… 目をそらす

「あるんだな? あるんだろ? 認めるよ」

「いえいえ、本当に美味しそうですよ? ……………… 見た目だけは」

普通の料理に紛れ込んだら見分けが付きませんし。

「何か最後についたわよね!? 見た目だけは普通なのね!？」

「あはは。いえいえ、とっても美味しいですよ? その…………… そうですね。天国に行けるくらいには」

「現実味がついていますよ!？」

耐性のない人には本当に見えますね…………… 天国が。

ブー……………ブー……………

ん? 携帯?

「ちょっと失礼しますね」

携帯を開いて受信ボックスを開きます。
えーと……

<<< 姫路瑞希 Re・お菓子

絵里ちゃん、明久君にお菓子を作っていたんですけど、余ってしまったので友利さんに渡しておきました。是非食べて感想を聞かせて下さいね！

「ゴフツ!？」

「」「吐血ツ!？」」「

そんな馬鹿な!？

このタイミングでトモちゃんにお菓子なんて渡したらそれこそこっちに渡されるに決まって

ぽとっ…… 私の鞆の中からバスケット(大)が出てくる音

「……………う、埋め」

ブー…………ブー……

「……………(ふるふるふるふる)」

若干震えつつも携帯を再度開きます。

「……………も、し……もし……」

“あ、絵里ちゃんですか？ お菓子、食べてくれましたか？”

「み、瑞希……いや、そのですね？ い、今仕事中で……」

“そうなんですか……なら良かったです”

「ふえ？」

“頭を使う作業には甘い物が必要ですよ？ 今開けて見てくれませんか？”

「……………」

バスケットをそつと開けると、そこにはサンドイッチが数個とシュークリーム、フルーツヨーグルトに饅頭など、本当に美味しそうな様々なお菓子が揃っていました。

「ほ、本当に……美味しそうですね……っ」

不意にこぼれてくる涙を止める術を私はまだ知りません。

ガチで。

“そうですか？ そう言って貰えて良かったです！ それじゃあ絵里ちゃん”

「はい……………」

“絶対に食べて下さいねっ！”

「……………イエス、ママ」

ピッ

……………

「絵里さん、これ美味しそうで」

「食べちゃ駄目ですよ！？ それはレイにあげるんですから！」

「そうなんですか？ まあ差し入れも大事ですよね？」

「お、おい……絵里、大丈夫か？」

「何か凄い思い詰めた顔をしているんだけど……………」

愚問ですね。

「もう1度死んだと言っても可笑しくない身。今更1度や2度死んだところで……………悔いは無いと信じたいなあ……………」

「そ、それじゃあまさかそれが……………」

「必殺料理人つて、知っています？ 当の本人は普通に料理を作っていると思っているのに、実際の所はバイオ兵……………殺人凶……………まあ取りあえず、耐性のない人は1発ですね、多分」

「……………今夜は泊まりになりそうね」

「まあ、仕方ないんだがな」

「今夜はお世話になります……………」

そう言うてからサンドイッチを手に取ります。

……………思いとどまってしまうですね。いざとなると。

ですがこれ以上死人を出すのは駄目なんです。

「いざー！」

サンドイッチを1枚ずつ丁寧に食べていきます。

……………ん？ 大丈夫？ え？

「何だ、大丈夫そうじゃないか」

「そうね……………」

「今のうちに……………」

サンドイッチを食べ、次を食べた瞬間。

「ふむふむ……………中はパリパリでありながら外はねちよねちよ。甘く

もなくしょっぱくもなく全ての味覚を混ぜ合わせたような不思議な味がなんとも　ゴホッ……」

……此処は？

「あ、絵里」

「久しぶりだな」

「明久、雄二」

「ワシ達もいるぞ」

「康太に秀吉もですか？」

ということは此処は生と死の境目、といったところですか。

「みんなはどうして此処に？」

「……料理」

「ですよ。かく言う私もそうなんですけど……」

「お、絵里も来てたのか」

「龍君」

「僕もいます……」

「信也君もとうとうこっちに来ましたか」

「は……」

「船賃は10万だ。最近是不景気でね」

「10万？ そんな……船賃は昔から3文と聞いていたんですけど

……」

「そつだぞ。10万は高すぎる」

「俺の財布には今5000円しかないぞ」

「2万円ほどしか……」

「300円」

「2900円じゃ」

「………6000円」

「5万6000円だ」

「3000円くらいしか……」

合計で9万3200円。

「あと6800円ですか……」

「誰か無いのか？」

「クレジットカードならあるんだけどな」

「金品つて売れないんですか？」

「何円相当のだい？」

えーっと……

「龍君のなら丁度70万相当くらいですね」

「さ、乗った乗った」

「………つて、乗ったら帰れないじゃないですか!？」

「はっ!?!」

「起きた!」

「良かった……まだ船には乗ってなかったのね……」

その日、私は改めて

“ 此処は平和なんだな…… ”

と認識させられたのでした。

森と魔女と必殺料理人（後書き）

その後。

「料理は私が作りますね」

「お願いしても良いかしら？」

「はい！」

料理中……

「ど、どうですか……？」

「美味しいです！」

「良くできてるじゃない」

「うまいんだぜ！」

「……あれ？」

入浴タイム

「絵里つて髪の毛おろしても可愛いわね」

「アリスさんの方が可愛いと思いますけど」

「どっちも綺麗ですよ」

「いや、全員だろ」

「……うん？」

就寝タイム

「雑魚寝で良いわよね？」

「はい」

「何か修学旅行みたいですネ」

「修学旅行って何なんだぜ？」

「みんなで旅行に行くこと、と考えて下さい」

「「「……………結局魔理沙帰らないの!?!?」」」

「面白そうだからな」

蓬萊人すらも倒す必殺料理人

「お世話になりました」

「おう！」

「アンタが威張ってどうするのよ……まあ、また来なさい。白もね」
「はい」

アリスさん達に朝別れを告げ、私達は人里に向かいます。

何でも人里には満月の夜になると角を生やす人がいるのだとか。

「つきましたよー」

「っと。ありがとうございます」

「いいえ。所で絵里さん」

「はい」

「そのお金はどこで？」

白さんが気になっていたのは私が持っているお金でしょう。
全部で10万円ほど。

「拾ってきたんです。超能力で地形を把握して、金銭らしき物の所
までこまめにレポートして」

「ご苦労様です」

「ただそのせいで殆どが小銭ですけどね」

「いえ、その方が良くも知れませんか」

「？」

よく分かりませんが……まあ兎に角人里で有名なところに行きましようか。

「えーっと、確か寺子屋と稗田の家でしたよね」

「はい。こつちですよ」

「あ、は」

白が、黒になった。

……はえ!??

「は、ははははは白さん?」

「? ……ああ、人間になっただけですよ」

「びっくりしますから……止めましょうね」

「すみません」

苦笑いをこぼしながら歩いていきます。

花屋、食堂、雑貨店、他にも色々あります。

服屋、和菓子屋……

……白side……

「絵里さん、こっちで」

「あ」

「って、何食べてるんですか!」

後ろを振り向けば絵里さんは茶店でお団子を頬張っていた。
いつの間にか……

………というか、そのお団子何本あるんですか!?
幽々子さんよりは酷くないけど……

「甘いものを食べないと私は電池が切れてしまつんですよ……」

「あなたはロボットですか」

「甘い物は私の力の根源ですよ? ホラ」

そう言つて自分の頭上を指さす絵里さん。
するとハートマークが出て来て×1からあり得ない速さでドンドン
数字が増えていく。

「というかそれアレですよね!?! この前紫さんがやってたげーむと
か言つ奴のですよね!?!」

「あはは。お嬢ちゃん面白いね!」

「あ、おばさん」

「おばさんじゃない、お姉さんだ……ま、良いわ。5本だけ追加し
てあげる。お姉さんの奢りだ」

「白ー、一緒に食べましょう」

「は、はあ……」

団子を1本手渡されたので頬張る。

……甘い。

「ん？ 白か？」

「？ あ、慧音さん」

「女将、こっちも団子を頼む」

「あいよー」

すぐに出て来た団子に少々驚きつつも、私は団子を食べる。
絵里さんかというと未だに辛せそくに団子を頼張っていた。

「絵里さん」

「んむ？」

「慧音さんですよ」

「……ん！」

用途が分かったらしく、すぐさま紙を取り出した絵里さん。

「？ そちらは？」

「音橋絵里です。えっと、上白沢慧音さんで間違いありませんか？」

「ああ」

「実はとある理由で皆さんに能力やらを聞き回っているんです。よろしければ教えて頂けないでしょうか？」

「ああ。それ位なら構わないよ」

「ありがとうございます」

にこやかに微笑む絵里さんは、本当に色々な意味で狡いと思った。

絵里 side

.

「 という能力なんだ」

「それはそれは……因みに今私の歴史って見えます？」

慧音さんの能力は歴史を食べる（隠す）程度の能力（人間時）と、歴史を創る程度の能力（ハクタク時）らしいです。因みに白と同じ獣人で、ワーハクタクと呼ばれているらしいですね。

「少し待ってくれ………ん？ 見えない……？」

「成る程………ありがとうございます」

「音橋も能力持ちなのか？」

「能力というか、超能力ですね。電磁波を操って………って言っても分かりませんよね。多分」

まあいつかと一纏めにして私は最後の団子を頬張ります。

「しかし、本当に美味しそうに食べるな………」

「美味しそうというよりも幸せそう、と言った方が正しいですね」

「甘い物のためなら財産を全部放り投げて構いません」

「因みに何円くらい？」

「えーっと、兆、位………？」

「やめておけよ？」

「絵里さんならやりかねません」

やりますよ。食べられるというなら。

「あやややや！」

.....? あやややや?

「この声は.....」

「そう！ スクープのあるところ私有り！ 清く正しい伝統の幻想
ブン屋の射命丸文とは私のことです！」

「相変わらず長いな.....」

「文さん」

「白、そちらの方が噂のエスパー美少女ですか？」

美少女？

「私は普通ですよ.....美少女っていうのは皆さんみたいなことを
言うんですよ？」

「天然ですか？」

「若干ですね。見ている限りは」

「? 何の話ですか？」

「いやいや、何でもないですよー。所で絵里さん」

「文さん、私からも」

「取材、宜しく願います」

2人の考えと行動が一致したときでした。

- - 取材中 - -

一頻り取材を終え、文さんの薦めにより竹林に向かいます。大体の有力候補者の名前と能力とかは聞き出せたのですが……百聞は一見に如かず。

やはり実際に確かめないと納得は行かない物でしょう。

暫く歩くと竹林が見えてきました。

そびえ立つ竹はまるで来訪者を拒むかのように生えており、一歩足を踏み入れてしまえば迷ってしまいそうなほど複雑に見えました。

「竹林に何か用か？ 白と銀色」

銀髪だから銀色ですか？

「妹紅さん」

「妹紅というと……藤原妹紅さんですか？ あの、もこたんって……」

「誰だそんなこといった奴……」

「文さんが」

「あの鴉、仕留める……」

まあ気持ちは分からなくもありませんが……

「まあ落ち着いて下さい。此処に来たのはあなたと、永遠亭という所に用事があるからです」

「？ 私？」

「はい」

「何の用？」

「取材です」

「は？」

もう何度目になることが。
取材を終えてふっつと溜息をついてから永遠亭に向かいます。
妹紅さんに案内をして貰おうと思ったのですが、文さんをハンティングしに行ってしまったので仕方なく彷徨っていると聞いたところですね。

「白、そこから3歩先に罠です。ジャンプして下さい」

「はいっ！」

「白、手を掴んで下さい」

「へ!？」

ジャンプした白をぐいっつと引き寄せます。
ジャンプをした先がまた新たな罠でしたか……ですが、まだ生ぬるいですね。

「白、わざわざ罠にはまりに行かないで下さい」

「絵里さんは何で分かるんですか!？」

「え? 分からないんですか?」

「分かりませんよ……普通は」

ま、この程度の物なら可愛い物ですけどね。

「白、身をかがめて下さい」

「だから何で分かるんですか」

「勘と言ったら怒りますか?」

「怒ります」

「なら超能力って事にしておきます。白には観察力が足りないらしいです」

「失礼な」

罨をかいくぐって行くと、建物が見えてきました。運が良かったようです。

トンツ 背中を押される

「きゃっ!?!」

ズボツ 落とし穴にはまる

「やっと引つかかった……」

「てゐさん!?!」

……

落とし穴の中ですね……これは。

深さは10メートルほどと思われます。

というか……

「痛い……」

涙も少し出る。

腕が、痛い。

とてつもなく痛い。

「だ、大丈夫ですか！？ 絵里さん！」

「腕を強打してしまっただかも知れませんが……とてつもなく痛いです」「やばっ」

「てゐさん、逃げないで下さいね」

「白の裏切り者！？」

上に見えるのは白とうさ耳のショートカットをした女の子。

というかいつの間にか私、白の事呼び捨てにしていますね……ま、本人も気にしていないようですし大丈夫ですよ……？

「取りあえず、飛べますか？ 絵里さん」

「あ、はい……」

ええっと……

力を込めて空に浮かびます。

ズキッと腕が痛む物の、飛んで白達のいるところにあがることが出来ました。

「師匠の所に行こうか……」

「白、この方は？」

「ああ、永遠亭の」

「因幡てゐだよ」

「私は音橋絵里です」

ペコリと頭を下げる物の、1つ1つの動作で腕が痛い。

……罇とか、入ってませんよね？

「あー……ごめんなさい」

「？」

「その……突き落とされたから、怪我したみたいだし」

「………偉いですね」

「ふえ？」

そつと目線を合わせるために屈み込み、頭を撫でてあげます。

「自分の失態を認めて、相手に謝るのはとても勇気があることです
から。だから、偉いですね」

そつと微笑む。

何故だか幼い頃の私を思い出してしまいます。

あの頃は私も悪戯ばかりしていましたからね……本当に、両親に迷惑をかけた物です。

「つ………// // //」

「？」

「てめさんは褒められ慣れていないんですよ」

「そうですね……それじゃあもう少しだけ褒めてあげましょう。偉い偉い」

「………（羨ましい………って、何考えてるんだろ？）」

暫く撫でてあげてから立ち上がります。

「そ、それじゃあ、診療所に行こうか」

「はい」

つと、着いていかない。

そしててめさんが踏み出した瞬間

「あ」
「へ？」

ザバツ 上から大量の水が一気に落ちてくる音

「「「……………」」」

少しの気まずい空気が辺りを支配します。

「てゐさん、これは一体……………」

「……………」 確か5年前に仕掛けた物だね……………」

「忘れても仕方がないですね……………」

「兎も角中に入って衣類を乾かそう。着替えなら鈴仙のがあるだろうし」

ということだったのでさっさと中に入り、渡されたタオルで頭を拭きます。

てゐさんの部屋に通され、私達は極力濡れないようにして座ります。

「鈴仙呼んでくるから、少し待ってて」

てゐさんはそそくさと自分の着替えに素早く着替え、鈴仙という人呼びに行きました。

「……………」 災難でしたね」

「それよりも腕、大丈夫なんですか？」

「……………」 大丈夫ですよ」

苦笑いをこぼしてしまう。

「……ちよつと失礼します」
「へ？」

つん 白が私の腕をつつく

「~~~~~!!!」 悶え苦しむ私

「……やっぱり大丈夫じゃないですね？」

「うう……」

痛みのあまり、ほろりと涙がこぼれそうになります。

まあ、堪えますよ。それはもう。

「お待ちせー……って、何で泣いてるの？」

「何でもありません」

「!?!」

まさかの言い逃れ!?

白め……「こつという修羅場を何回もかいくぐってきていますね……？」

「どうも……てぬがご迷惑をおかけしたみたいで……」

てぬさんが入ってきた後で、服を持ったこれまたうさ耳の方が入ってきます。

「あ、私は鈴仙・優曇華院・イナバと言います」

「音橋絵里です」

何度もしたのであるう自己紹介を再度繰り返し、そして一呼吸おいたところで鈴仙さんが口を開いた。

「これ、着替えです。白の分も」

「ありがとうございます」

「着替えたら師匠に腕を見て貰って下さい。てめに案内させますか」

「」丁寧ありがとうございます」

「それじゃあ私は師匠に話しをしてきますので」

「あ、1つ良いですか？」

「はい」

「敬語、別に良いですよ」

「……………分かったわ」

そう言っただけで走り去っていく鈴仙さん。

「それじゃあ着替えましょうか」

「はい」

服を脱いで鈴仙さんの持ってきた服に着替えていきます。
学生服みたいで慣れた物ですね…………

「スカートが短い…………」

「ああ…………白はそう言うのが無理なんですか」

「あんまり慣れません」

「それじゃあ短パンとか、スパッツとか穿いてみますか？ 私ので

よければですけど」

「良いんですか？」

今考えればですけど、鞆は私の家に繋がってますからね。

「はい」

取りあえずスパッツを渡します。

「ありがとうございます」

そう言つてスパッツを穿く白。

……いや、駄洒落じゃありませんよ？

因みに私は装備済みです。

中学校時代なら長いジャージとか穿いてたんですけどね……いや、友達とやってみない？ みたいなノリで。

「こつちに来て。師匠の所に案内するから」

「はい」

「私も着いていって良いですか？」

「良いよー」

軽いな……

そう思いつつ、てゐさんの後ろを着いていく。

立派な屋敷の廊下をすつと歩いて、これもかと言つほどに生えそろつた竹林を見る。

それもすぐに消えて、また建物の中。

そして1つの部屋の前でてゐさんはコンコンと控えめにノックをします。

「師匠」

『入って頂戴』

ガラツと扉を開けると、そこには銀髪の髪を後ろで三つ編みしてい

る女性が座っていました。
アンシンメトリーというか、何というか。
不思議な服装をしているその人はこちらを見てからぎしっと椅子から立ち上がった。

「あなたが音橋絵里さんね。私は八意永琳よ。よろしく」
「あ、宜しくお願いします」

「そこに座って頂戴。腕を痛めたんでしょう？」

そう言われたので、椅子に座る。

Yシャツの袖をまくって患部を見せる。

……心なしか、青くなっているような……

「……酷い打撲ね。触ると痛いかしら？」

「とても痛いですね……」

「ちょっと触っても良いかしら？」

「……お手柔らかに」

ちよいつと触られるだけで走る激痛。

「~~~~~!!!!」

「そんなに痛いのか？……てゐるが本当に迷惑かけたわね。後でお仕置きしなくちゃ」

「い、いえ……そこまでは、しなくて良いです……」

「優しいのね」

そんなことよりも痛い、というのが本音です。

隣に座っている白が背中をさすってくれます。

うう……

「取りあえず痛み止めと、腕に包帯しておいてあげるわ」

「ありがとうございます……」

「ただし、あまり触らない……つまり、衝撃を与えないこと。良いわね？」

「もし動かしたらどうなるんでしょうか？」

「1週間で治る怪我が大凡1ヶ月くらいかかるだけよ。しかも激痛が伴うわ」

「誰にも触らせません」

「それが1番ね」

そう言っつて薬を塗って包帯を丁寧に巻いてくれる永琳さん。

「所で、こんなに酷くなつていても気付かなかつたのかしら？」

「痛みがあるとは分かっていましたけど……色の判別は流石に」

「こんなに青くなつてるのに？」

「よく友人が紫色になつていいるからでしょうか……昔、女の子に腕を極められて指1本動かなくなつた友人がいましたからね」

「どういふ状況だったのかしら……」

……

「……どう考えても日常茶飯事のこととしか……」

「……どう考えても日常茶飯事じゃないわよね!？」

「え？ 私の友人は……他の友人ですけど、よく鼻血を噴射しますよ？ 一瞬で出血・止血・輸血を自分で済ませるほどに日常茶飯事ですけど……」

「あの……本当にどういふ状況にいたんですか？」

白や永琳さんが心配そうな目でこちらを見てきます。

……まあ、確かに異常ですね……多分。

「まあまあ。それよりも聞くところによると蓬莱人って死なないんですよね？」

「え？ ああ、私と姫の事ね」

「はい」

……瑞希の料理を食べさせても、大丈夫なんでしょうか……

「あの、硫酸とか、塩酸とか、飲んだことありますか！？」

「無いわよ！？」

「そんな……」

「あなた、私達をどう思ってるのよ……」

死なない人です。

「……あの、じゃあ……この料理、どう思いますか？」

「？ 料理？」

バスケットを広げて中身を見せます。

そこには一般の方々にはとても美味しそうな料理が並んでいます……

……

が！

私達事情を知る人にとってそれは恐ろしい兵器となり目に映るので
す。

「あら、美味しそうね？」

「まだ残ってたんですか？」

「ああ……この料理、何故か腐らないんですよ……」

何を入れているんだか……まさか料理の中に防腐剤とか入れてませんよね……？」

「腐らない？ ……興味があるわね……食べてみても良いかしら？」

「死なないのならどうぞ」

「？ それじゃあ頂くわね」

ひよいと手頃なビスケットを掴み、口まで運ぶ永琳さん。

「ふむふむ。ビスケットといえばサクサクとしているはずが何故かネチヨネチヨと絡みつき、甘くもなくしょっぱくもなく辛く苦い味わいが何とも　ゴフツ！？」

ガタツガタガタツ！　永琳さんが倒れる音

「生きてますよね……？」

「何でそんなに冷静なんですか！？」

「取りあえず横にしてあげましょうか……あと白、お茶を貰ってきて下さい」

「わ、分かりました！」

永琳さんをサイコキネシスで持ち上げベッドの上に運びます。
いや……本当に死にませんよね？

一応脈を……

……

「……………よし。スタンガンだ」

若干意識が遠のいているから。
スタンガンを取り出して電力を最大に上げる。

「失礼します」

バチチチチッ……………

「はっ！？」

「お帰りなさい」

「……………初めて三途の川を見たわ……………というか運賃が高いわね……………意外に」

「私の時は10万円でしたが」

「私は30万だったわよ」

はあ、と互いに溜息をつきます。

「これは私達が処分しておいてあげるわ。幸いなことに死なないし

……………実験にも使えそうだしね」

「お願いします。バスケットは返して下さいね」

「絵里さん、お茶持ってきました！」

「ありがとうございます」

白からお茶を受け取って永琳さんに渡します。

「？」

「お茶には解毒作用があるとか無いとか……………気休め程度ですが、一応飲んでおいた方が良いでしょう」

「……そうね」

お茶を飲み終えてから永琳さんが口を開きます。

「取りあえず、あなた噂の人でしょう？ 姫様とか呼んでおいてあげるから、さっさと取材して行きなさい」

「ありがとうございます」

「……良い子ね」

「？」

ぽふっと頭を撫でられる私。

「……懐かしい、というのが第一の感想だったので、その後暫く頭を撫でられていました。」

蓬萊人すらも倒す必殺料理人（後書き）

「ご馳走になりました」

「ええ」

「……あの、所で……」

「何かしら？」

「永琳さんに薬を飲まされた直後から猫耳と尻尾が生えてきたのですが……」

「あら。良いじゃない……腕を6本に増やされた訳じゃないんだし」

「……仲間みたいで嬉しい」「」

「私人間ですよ！？ 兎でも、半人半獣でもありませんからね！？」

こんな事があつたら、嬉しい。

紅魔の館の狂気姫

「絵里、これ本当に貰っても良いの？」

「はい。大丈夫ですよ？ 輝夜さん」

取材を一頻り終えた後、本物のかぐや姫である“蓬萊山輝夜”さんに私のゲームを渡しました。

「最新のゲームですけど……まあ、私が持っけていても時間がなかなか取れませんからね……だからどうぞ」

「ありがとうございます！ お礼に何かあげるわ！ 何が良いかしら？」

興奮している輝夜さん。

何か、か……何が良いかな……

「じゃあ不思議な薬を一つ下さい」

「えーりん！ 薬ー！！ 面白いのねー！！！！」

そう叫ぶ輝夜さん。

それにしても輝夜さんか……

「輝夜さん、これで良いですか？」

「ありがとうございます！ はい絵里！」

「あ、ありがとうございます」

「絵里、私のことぐーやって呼んで良いわよ？ 特別だけどね」

「ではぐーや。攻略本とかも付けますか？」
「えーりん薬追加ねーッ！！」

わーい。

この薬、何の薬か分からないけど使えますかね……

「はい、どうぞ」

「所で何の薬なの？」

「……………何の薬かしら……………死なない程度の薬だったはずなんだけど……………」

「まあ大丈夫ですよね」

「多分ね」

「……………(そう言う問題だっけ?)……………」

取りあえず薬を仕舞って……………

「そろそろ行きますか？」

「そうですね……………」

白に言われ、私もそろそろ動く気になります。

「えー、もう行くのー？」

「ぐーや、通信プレイという物がありますよ」

「行ってらっしゃい」

「早!?!?」

まあ何はともあれ出発した私達。

えーっと次は……………

「次はどこに行くんですか？」

「紅魔館に行ってみたいです」

「……………分かりました」

「何があつたんですか？ 白」

「イエ、ナンデモアリマセンヨ？」

カタコトですな……………

ふむ……………私の経験と勘から察するに……………

紅魔館と言うところに嫌な思い出があるか、嫌な人物がいるか。

「まあ何にせよ行かなくてはなりませんし……………大丈夫ですか？」

「……………はい」

少し心配ですが……………まあ些か仕方がありませんね。

白と一緒に空を飛んでいくと、湖と紅い館が見えてきました。

「彼女ですよ……………」

「でしょうねえ……………とても紅いです。目がしょぼしょぼします……………」

「大丈夫ですか？ フラフラしてませんか？」

「能力の使いすぎですね……………多分」

そろそろ連続で能力を使うことにも疲れてきましたし……………

仕方がありませんね……………

改良中であるはずの超能力を使うことを可能にする薬を取り出します。

「それは？」

「薬です……………けど、私薬苦手なんですよね……………」

「……………（子供の時の紫さんみたいなことにならなければいけない……）」
「ううう……………うううのは覚悟ですよね……………」

鞆の中からペットボトルの水を取り出します。

……………いざ……………！

「はむっ……………ごっく……………ううううううう……………」
「頑張りましたね」

ささすと背中をさすってくれる白。
私の方がお姉さんなのに……………

「だ、大丈夫です……………行きましょう」

「はい（紫さんよりはマシだった）」

紅魔館の前で降りて館全体を見渡します。

赤。それ以外の色合いは空の青と雲の白。そして木々などの緑や花々など。

なんで赤にしたんでしょうか……………

「で、この寝ている方は？」

「紅美鈴さんですね……………でもこの様子からするともうそろそろで……………」

グサグサグサツ！！！！ 美鈴さんにナイフIN

「ぎにゃああああああ！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

「……………何事!？」
「遅い!？」

私と白がそれぞれに突っ込むと、今度は新たに人が現れます。

「全く……………門番としての自覚がないようね、美鈴」

凜とした声が耳に聞こえます。

一瞬にして門を超えて現れたのはメイド服に身を包み、銀色の髪をした女性。

「咲夜さん」

「あら、白」

……………また何とも美人ですね、はい。

「と、そちらは？」

「只今幻想郷で取材を行ってます、音橋絵里です」

「私は紅魔館のメイド長の十六夜咲夜よ」

メイド長だからメイド服ですか……………成る程。

それにしても、やっぱり何処かに聞き覚えが……………

「で、咲夜さん達にも取材をしたいんですけど……………大丈夫ですか？」

「……………取材、ね……………良いわよ。入って頂戴」

「ありがとうございます」

少しして門が開きます。

咲夜さんは綺麗に微笑んで口を開きました。

「ようこそ。悪魔の館、紅魔館へ」

.....

「ようこそ客人。私が紅魔館当主のレミア・スカーレットよ」

小さな吸血鬼が深紅の瞳を煌めかせて優雅に言い放ちます。
多大な威圧感。
そして溢れ出す殺気。

.....
そうですね。少し居心地が悪くは感じますが.....

「.....大した人間ね。私の前で堂々としてられるだ何て
「慣れです」

「「慣れ!?!」」

「え? 可笑しいですか? 慣れですよ? 凄くごく普通の慣れで
すよ?」

「慣れって.....どういう環境にいたのよ!?!」

.....

「.....一度踏み外してしまえば簡単に人という枠を外れ死人と
いう枠にはまってしまう、もしかしたら人外にですらなってしまう
場所.....ですかね?」

「どんな場所ですか!?!」

だからそこですって。

「仕方が無いじゃないですか。FFF団やら変態やらでこっちも手一杯なんですから……というか私自身こんなになるなんて思いませんよ……」

「……いや、その……悪かったわね」

「いえ……」

「そう言えば新聞でなにやら面白そうな事を言っていましたね……何でも2人の人間が鬼を相手に勝ったとか何とか」

2人の……“人間”……

「それってまさか……いえ、そんなはずは……でも万が一……」
「どうしたんですか？ まさかその2人が知り合いとか言いませんよね？」

「面白い冗談ね」

「そうね」

「そ、ソウ德斯ネ。アハハハハ」

「「「……………目を見て言え、目を」「」」

多分美穂と真由子でしょうね……あの変態……

「と、兎も角取材をお願いします」

「まあ構わないけど……条件があるわ」

「？ 場合によります」

そう言うとレミリアさんはニヤリと笑うと私に向けて言いました。

「私の妹……フランと弾幕ごっこをして頂戴」

弾幕ごっこ。

それは幻想郷で唯一認められている……まあ、決闘法のような物です。

スペルカードと呼ばれる物を用いてやるのですが……

まあ、スペルカードはありますが……

「……………」

何故でしょうか。

長年故の勘というか、野生の勘というか……………

「あの、さっきから嫌な予感しかないんですが」

「（思った異常に勘が鋭いわね）」

ううん……………

「命の保障は……………」

……………無いんですね。はい、分かりました」

皆さん一斉に目をそらしましたよ。ええ。

「まあ、死んでも別に今更って感じですし……………良いでしょう」

「良いの!?!」

「はい。どつぞ」

「咲夜、案内しなさい」

「畏まりました。こちらです」

あ。そうだ。

「ちゃんと取材は受けて貰いますよ？ 私が死んだら白に代行して貰いますので」

「ええ。構わないわ」

「って、私ですか!？」

「白、もしものは頼みます」

「……………分かりました。でもなるべく生きて下さいね？」

……………1度くらい神様の間違いで死んだことは言った方が良くいんでしょ
うか……………？

ま、まあ言わない方が良いでしょうね。

べ、別に説明がめんどくさいとかそう言うのじゃありませんよ？

地下へと続く螺旋階段を悶々とした気持ちで下り、1つの扉の前に
来ます。

頑丈そうな扉。

そして、扉一枚隔てた向こうからビシビシと伝わってくる狂気。

闘っては行けない。

すぐに逃げた方が良くい。

そんな考えがふと頭を過ぎります。

この向こうにいる相手は……………

「妹様、新しい遊び相手でございます」

咲夜さんがいとも簡単にギィィと扉を開ける。

その向こうの暗がりに見えたのは金色と深紅。

どことなくレミリアさんに似たその少女は

「今度のは簡単に壊れないかしら……私はフランドール・スカーレ
ット………ねえ、遊びましょうっ？」

悪魔の笑みを浮かべて私を歓迎してくれた。

「ああ………最悪ですね」

紅魔の館の狂気姫（後書き）

少し遅れました（テヘッ）

あ、やめ……石を投げないで!?

え？ いや、石じゃなかったら良いという訳でもないからね!?

料理は戦い！ 本の魅力とは……？

ドンドンドンドンドンドン……！！

「ううううう！！……？！……？！……？！……？！……？」

声が若干しか出ないほどに焦っている。

「アハハハハッ……！！」

何なんですか、アレ！ 何で笑いながら攻撃をしてくるんですか！
？ はつきり言って怖いですよ！？

「禁忌」

「スペカッ！？」

「『クランベリートラップ』」

素早く間隔の狭い弾。

くっ……こちからも切り返しを図りますか……

「創造『天から遣わされし者』」

私のスペルカードは主に身の回りの出来事や人物を象っています。

無論、このスペルカードが象るのは

「 レイツ!! 」

レイの召喚獣と全く同じ装備をしたレイ。
そしてレイは弓を構え始めます。

「 そんなの無駄だよッ!! 」

「 残念。私の狙いはスペルブレイクよ 」

弓を放ったレイ。

その弓が増殖を繰り返し、弾幕の1つ1つを打ち消していきます。
そして増殖したうちの1本がフランドールに向かって……

ボキッ 折られる音

「 「折られたーッ!?!」 」

「 禁弾 『スターボウブレイク』 」

「 「しかも何か来たーッ!?!」 」

レイが弾幕に当たって消えます。

流石は吸血鬼…… 威力も速さもはや人外……………

吸血鬼?

「 逃げてばかりじゃつまらないよ? 」

吸血鬼。

民話や童話、童謡などに良く出てくる吸血鬼。

生命の源であるとされる血を吸うことで己の寿命を延ばし続ける、

恐ろしい怪物。

ドラキュラやヴァンパイアとも呼ばれる怪物ですね。

発祥はカタレプシー……：蟬屈症と呼ばれるものを死亡と信じた人々によつて埋葬され、棺の中で蘇生した人や、死蟬など埋葬された時の条件によつて腐りにくかつた死体への錯誤、あるいは黒死病の蔓延による噂の流布により生まれたとされるあの吸血鬼。

吸血鬼は神に背いた者。

眞実を映し出す鏡には姿が映らず、

聖なる水の前には屈することしか出来ず、

木の杭によつて心臓をうてば蘇ることは出来ず、

神聖とされる銀で攻撃すればその身は爛れ、

鼻がききすぎるためにニンニクの匂いを嫌い、

キリストの象徴である十字架も嫌い、

日光に当たれば灰になると言われている

あの吸血鬼だとするなら。

「今この場に適しているのは……レイよりもトモちゃんのようにです

ね……」

そう思つてスペルカードを再び取り出します。

ですが取り出したのは………

「瑞希……！？」

トモちゃんのは……他所………

「些か仕方ありませんか……創造『必殺料理人』」

「これからお料理を始めます」

場違いの空気に気が抜けてしまいます。

………こんなスペルカードでしたっけ………？

「はい、絵里ちゃん」

「み、瑞希………？」

「カルパッチョを、作つてみたんです」

さー……… 血の気が引いていく音

「………ありがとうございます………」

「それじゃあ私は帰りますね」

………瑞希の料理で立ち向かえと。

「お姉さん？ 何か食べるの？ でもその前にフランがお姉さんのこと食べちゃうかもね？」

「それはカニバリズム的な意味かはたまた他の意味なのかは分かりませんが……覚悟ッ!!」
「え？ 何むぐうっ!？」

瞬間移動を使ってフランドールの口にカルパッチョを送ります。

「何これ？ 酸っぱいけど何処か甘くて塩辛くて不思議な味わいがあるけど何か溶けるような感覚がとっても印象て ぐふっ!？」

……さて。

「取りあえず、蘇生術から始めましょうか」

多分瑞希の料理なら、不死の人でも瀕死の状態に追いやることが出来るでしょう。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

残ったカルパッチョを取りあえずフランドールの口の放り込んだ後に蘇生をし終えました。

……鬼のような行為をしたことは理解しているつもりですよ？

「まさか本当に生きて帰ってくるとはね……」

「染みるけど我慢してね」

「いや、生きて帰ってきたら悪いみたいない方しなっ……」

「……！！！！！」

現在は腕などの切り傷などを治療して貰っています。

つていうか染みて声すら出ないんですけど……！！！！

「あと3カ所ね」

「……所で白はどこに？」

「図書館ね。やることがないからって言って。結構そわそわしてたけど」

「あー……っ！？」

「はい、終わりよ」

不意打ちをつかれた。

今のは油断していた分凄く痛かった。

「……まあ流石に関節が外されたりしなくて良かったです」

「関節が外れるって……」

「私のいたところでは結構日常茶飯事でしたね」

「関節を外されるのが？」

「殺し合いが起こることがですかね……？」

「……あれ？ 幻想郷ってもしかして結構安全じゃありませんか

……？」

「……殺し合いって……」

「いえ、一部で起こるだけです。本当に」

そうじゃないと私はもう死んでるでしょうし。

「それじゃあ白を迎えに行く前に取材、お願いしますね」

「ええ。咲夜も応じなさい」

「畏まりました」

……麻月を見ているせいでしょうか……

咲夜さんみたいないなメイド、始めてみました。

……取材中……

「ありがとうございます」

「いや、天狗のよりは簡単だったし面白かったから良いわよ」

「そうですね……天狗の場合はウザくなってきますから」

その人が見てみたくなったのは秘密です。

「それじゃあ白の所に行きますか」

「咲夜、案内してあげなさい」

「畏まりました」

「……メイドってこういう物ですよ、普通」

「？ 何か言いましたか？」

「いいえ、何でも」

私の常識は非常識、私の常識は非常識、私の常識は非常識……！！

！！

そう思いながら咲夜さんに着いていきます。

それにしても、メイドの背後なんてなかなか取れる物じゃないと思っ
っていましたか……

サラサラな銀色の髪に、私よりも高い背丈。

紅に対して銀色という事もあってか良く栄えますね。

……私も銀髪ですけどあまり髪型は変えませんかからね……

随分と前に瑞希に取られたことはありますけど。

「咲夜さんは髪型変えますか？」

「突然ですね……」

「あ。敬語は良いです」

「……分かったわ」

多分私の方が年下……だと思っ。

「で、髪型は変えますか？」

「……変えないわね。大抵この髪型よ？ 絵里は？」

「私もですね。たまに襲われたときに髪留めとかは外れたりします
けど」

いきなり歩みを止めて振り返って私を見る咲夜さん。

「……」

「あ、あの……？」

「ちよつと失礼するわね」

「へ？」

気付いたときには髪が重力に従って落ち、咲夜さんの手には私の髪留めが……………

「!？」

「……………(可愛いわね)」

「な、何やってるんですか！」

「いや、面白そうだなって思って」

……………はあ……………

「じゃあ仕返しです」

「？」

咲夜さんの髪を結んでいたリボンをレポートで私の手の中に落とし、サイコキネシスで三つ編みをほどきます。

……………まあ、綺麗ですね。普通に。

「……………いつの間に」

「それはこっちの台詞でもありますね」

「……………それもそうね」

シリ……………

「何を身構えているのかしら？」

「それはこっちの台詞です……………何でこっちを狙ってるんですか……………」

「たまには他の髪型も良いと思っつのだよ」

「そっちがそのつもりならこっちもやりますよ……………?」

「望む所ね」

白 side

.

図書館に現れた絵里さんと咲夜さんはそれぞれ違う髪型をしていた。

咲夜さんはいつも三つ編みをしているのに対して今はポニーテール。
絵里さんはいつも髪を上げているのに対して今は2つ縛り。

……どっちも意外で、しかも普通に可愛いし綺麗だった。

「どうしたんですか……?」

「い、いや……」

「ノリでって言うか……」

「「兎に角そんなに見ないで……」」

2人揃って顔を赤くしながら目をそらす。

……嫌ならやらなきゃ良いのに……

「で、此処には確かまだいたはずですよね?」

「パチユリー様と小悪魔ね。あと妹様に取材はしたの?」

「してませんけど……まあ、ある程度思念波が流れこんで来ましたから心配性は皆無です」

「そう」

……聞いてる限りでは、多分パチュリーさんと小悪魔さんに取材をしてから次に行くんだろう。

「それにしても凄い数の本ですね……蔵書数を一冊一冊調べていたら何年かかるんでしょうか？」

「最低でも50年はかかるんじゃないかしら……でも此処は本の出入りが凄いから」

主に魔理沙さんによってだろう。

「そうなんですか？ でも本は良いですよ？ ……そうですね……」

そう言っただけで絵里さんは徐に1冊の本を手取る。

深い緑色の表紙をした分厚い本で、特に何も無いけど……

「この本、所持者が次々と変死してますね」

「……は？」

「書いた人が失恋したんでしょうね……すっごく怨念が籠もってますよ」

そう言いながら凄く嬉しそうな顔をする絵里さん。

え……怨念って……？

「初めて所持した人はまるで誰かに首を絞められたように死んでますね。完璧な密室」

「何でそんなに嬉しそうな表情で言っのよ!？」

「2人目は……ああ、これは酷いですね。焼死ですか」

「も、もう良いですからッ！！？」
「そうですか？」
「それはもう是非ともッ！！！！」

面白いのにと呟いて本を元の位置に戻す絵里さん。

「じゃあ次はもっと凄いのを……」
「止めて!?!」
「じゃあ逆に幸せになってる本とか」
「幸せ……?」
「えーっと……」

本棚の中からまた1冊取り出す絵里さん。

「生き別れた家族が戻ってきたり、埋蔵金を掘り当てたり……あ、これは凄いですね。死んだと思ったら生き返ってます」
「凄いわね……」
「どうしてそう言うのが分かるんですか？」
「大抵は勘と能力ですね。ま、便利ではありませんけどね」

そうして本をまた戻す絵里さん。

「興味深いわね」
「！ パチユリーさん」
「咲夜に白……と、あなたがレミイの言っていた奴ね」
「音橋絵里です」
「私はパチユリー・ノーレッジよ。話しは大体聞いているわ。取材だったわね」
「はい」

メモ帳を取り出す絵里さん。

それに対してパチユリーさんは考える素振りを見せてから言った。

「ただし、そつちの世界にある本の話しをしてくれないかしら？」

「本……ですか？」

「ええ」

「まあ良いですよ？」

「交渉成立ね。小悪魔」

「はい！」

そして出て来たのは小悪魔さん。

「あ、それじゃあ早速　っ！？」

「「「「「？」」」」」」

いきなり息を呑んであちこちを見渡す絵里さん。

？ 何かあったんだらうか？

「どうかしたの？」

「……いえ、多分大丈夫です……は、早く済ませましょうか」

何かに怯えている絵里さんを見るのには、多分かなり慣れたと思う。
そう思った瞬間だった。

料理は戦い！ 本の魅力とは……？（後書き）

「絵里ちゃんが褒めてくれましたし、新しいお菓子に挑戦してみましよう」by瑞希

「（……絵里に最近会ってない。絵里が帰ってきたら、たっぷり……）」by翔子

「うへっへっへ……」 変態2名

「絵里、大丈夫かな……っていうか早く帰ってきてよね……」by友利

変態2名は現在鬼2名を相手にしているようです。その後は多分霊夢さん辺りに倒されるんじゃない……

ま、その方が良いんですけどね。by作者

新たな戦いと彼岸の死神達

「……………あら。物騒なお客人ね」

太陽の畑。

向日葵が咲き誇った中で1人の女性が佇み、もう2人に視線を向けた。

「アハハハハ。あのですね？ 私達は今人を探しているんです」

「……………」

「銀髪で可愛くて愛らしくてもうどこをどう表現し続けたらきりがないようなそんな人なんですけど……………ご存知ありません？」

「し、知らないわ」

最強、と言われた妖怪でも、この2人組のテンションについて行けないらしい。

「そうですね……………でももしかして隠してました、何てことありませんよね？」

「？ 何言ってるのよ」

「絵里を渡して貰います」

「……………弾幕じっじ、って訳ね」

ここでまた。

新たな戦いが始まっていた。

とところ変わって紅魔館【ヴワル図書館】
- - - - -

「……………とまあ、大半はこんな感じですね」
「そんな本があるのね……………あと幻想入りしてきた本がくだらない理由も何となく分かったわ」

取材と本。
どちらとも詳しく話し合った私達。

時刻は大体6時頃。
お腹も減ってくる時間でしょね。

「じゃあ私達はこれで帰りますか」

「あら、泊まっていけないの？」

「いえ、そこまでお世話になるのも」

「絵里？ 私のこと忘れてないよね？」

……………ふ、フランさん……………？

「何アレ！ 怖かった！」

「いや、すいません……………あの、アレは事故なんです……………」
「何したのよ……………」

いつの間にかいた咲夜さん。
う……………

「み、瑞希の特製カルパッチョを食べさせてあげました」

「……………カルパッチョ？」

「カルパッチョで三途の川が見えるなんて初体験だったよ……………」

言っておきませんが私が作ったんじゃないやありませんからね……………

説明中……………

「何て事を……………」

「そうですね……………あの綺麗なお花畑を幾度となく見た私から言わせ
て貰うと……………1回食べただけで音を上げないで下さい」

「……頑張つて」
「……ごめんなさい」

べ、別にこれは涙とかじゃありませんよ？
これは………。そ、そう！ 目に埃が入ったんですよ！ 私、ドラ
イアイですから！

………ぐすん。

「それじゃあ着いてきて。泊まる部屋の準備が出来たから」
「「いつの間に……」」

なんやかんやで泊まることが確定していました。

.....

何だかんだの翌朝。

「今日は残りを一気に回ってしまいましょつか」
「太陽の畑と彼岸ですね」

朝食を美味しく頂いた後、私と白は行く場所の最終確認を行って
いました。

「これで最後ですか……長いようで短かったですね」
「そうですね……少し寂しいですね」

そんな会話を軽めに済ませ、私達は咲夜さんに一言断ってから紅魔館を後にしました。

「……良かったんですか？ お嬢様」

「何が？」

「あの2人のこと、私達好きじゃないですか。引き留める運命でも何でも出来るんじゃないんですか？」

「……それも良いのだけどね……絵里には、ちゃんとした運命があったから。白の運命は相変わらず見えないけどね」

「絵里の運命？」

「ええ……絶対に笑顔で帰る運命。それはよほどのことでは覆されそうになかったわ。パチエも気になるの？」

「まあね……でも、絶対って………凄いわね」

「まあ、運命は変わるわ。だから少しだけ心配だけど………まあ、いざとなったら」

「「その相手をつぶしに行けばいいだけね」」

「……………（何だかんだで、紅魔館の住人は2人の事大切に思ってるのよね……………」

紅魔館ではそんなやりとりが展開されていることもつゆ知らず、2人は太陽の畑へと近づいていた。

「……………白。さつきから思っていたんですけど……………」

「何ですか？ 絵里さん」

「この辺り、少し荒れていませんか？」

私が気になったのは、どう見ても闘った後であるところ周囲の凹凸や焦げ後。

いくら何でもこれは酷すぎです。

「この先の太陽の畑には……………多分最強といっても良いほどの人がいますからね」

「へえ……………」

「でもこれだけ荒れているのは確かに不思議ですね」

ゾクッ……………

「は、白！ 彼岸の方から先に行きますよッ！」

「え？ ど、どうしてですか？ もつすぐで」

「嫌な予感しかしないんです！ 行きますよ！」

「へあ！？」

嫌な予感。

きつと、それはバカをやっているあの2人についてでしょう。
美穂、真由子……………お願いですからあまり目立たないで下さい。

「絵里さん。何故だか分かりませんが……………時既に遅し、つて言葉知つてますか？」

「……………ええ、知ってますよ……………」

ただ現実を認めたくないだけです。

少しばかり走ると、空気が冷たくなりつつあるのが感じ取れた。

「……………そろそろ飛んでも大丈夫ですね」

白に飛ぶよう合図をして私達は飛びながら目的地に向かいます。
飛んでいくうちに、次第に彼岸花が見え始めます。

彼岸花。

花言葉は

【悲しい思い出】

【想うはあなた一人】

【また会う日を楽しみに】

悲しい思い出では即ち人生の汚点などを表し、

想う人はあなた一人は人生の恋を表し、

また会う日を楽しみには次の人生を表すと、

私は解釈しています。

「……………」

「どうかしたんですか？ 絵里さん……なんか、具合悪そうですけど……………」

「……………いえ、何でもありません……………ただ、少しだけ私は彼岸花の事が好きではないんです」
「え？」

「……………白、行きましようか」

作り笑顔を浮かべてから、また進む。

そこには川がサラサラと流れていて、船が幾つか遠くの方に見えるだけの寂しい景色だった。

……………うん。いつもの景色ですね。割と。

「ん？ あ。白じゃないか。と……………横のは……………って、またアンタかい」

そこにいたのは変わった鎌を持った女性。

赤い髪をツインテールにしているのが特徴だった。

「あ……………多々お世話になっております？」

「アンタも大変だね？ 何でそう何度も死にかけるのか分からないな」

「いや……………アレは仕方ありません。はい」

「そうかい……………で？ 2人はどうして此処に？」

「取材をしに」

いつもの言葉を、私達は笑顔で言う。

- 取材中 -

「どうもありがとございました」
「いや。どうって事無い啦」

取材を一頻り終える。

「で？ 小町は何をしているのかしら？」
「「「っ！？」」「」

突然の声に驚いてしまう。
後ろを振り返ると、そこには見知った顔があった。

「レイ！」
「っと……お疲れ様、絵里」

ノリで抱きつく。
はあ………安心しますね、やっぱり。

「……で？ 小町は一体何をしていたの？ サボり？」
「うぐ……」
「何よ、サボってたなら私も混ぜなさいよ」

「「「そう言う問題!？」」

「あ、すいません」

「「あ、良いんだ……」」

少し呆れつつも、私は1度仕舞った幻想帳を取り出します。

「レイ、頼まれていたのですよ。会えた人だけで、会えていない人もいますけど」

「まあ大まかつて言ったのは私だし、別に構わないわよ」

………

スカッ

「? 絵里？」

「そんなの駄目なんです……なんか嫌です! 私は絶対全員分作るんですから」

「でももう少しで全員分っていつか時間切れって言うか……」

「少し待っていて下さい……30分……いえ。10分待っていて下さい」

それだけ言い残して私は瞬間移動を試みた。

白
s
i
d
e
.....

「待っていて下さい」

それだけ言い残して絵里さんが消える。

「あー……行っちゃった……ま、大丈夫よね……」

「えっと……良いんですか？」

「多分……っていうか、自己紹介がまだだったわね。私は音橋レイ。絵里の妹よ」

「あ、白と申します……っていうか妹さんですか!？」

「意外でしょう? あと1人いるわよ? 妹」

クスクスと笑うレイさん。

確かによくよく見るとどことなく似ているような気もしてくる。

……でも、何でレイさんが彼岸なんか……?

……そう言えばさっき抱きついていたし……

も、もしかして……

「れ、レイさんって生きてますか?」

「? ……! さあ、どうかしら…… (面白そうだから曖昧な答

えを返しておこう) 」

「え!？」

「随分と前に凄い衝撃的なことがあったよつな気がするんだけど……

…何故か思い出せないのよ」

……まさか、レイさんが死んでいるから彼岸にいるとか……?

話しに聞くとところによると、結構善行を詰んだ人とかは勧誘されるって言ってたけど……

「!、ご愁傷様でした……?」

「ふふ。ありがとう」

その時だった。

「ただいまなさいですっ!!」

どさどさどさつと絵里さんを含めた色々な物が落ちてきます。

「え、絵里？ 何を持ってきたのよ……？」

「資料ですね。これまで撮り溜めてきたネガや新聞等々を借りてきました」

「流石ね……」

「これから資料纏めに入ります」

「かかる時間は？」

「3分で充分です」

それだけの会話をして絵里さんが資料に目を通し始め

「「早ッ!?!」」

目にとまらぬ速さ。

次々に捲っては次、また次。しかも写真まで同時に見ているのか、次々と展開されていく状況に、私と小町さんは絶句しかできません。レイさんは見慣れているため、流石ね……とか呟いていますし。

「出来ました!」

「流石ね」

「レイには後で「コピー」あげますね」

「ええ」

「ピ」……？ 写すんでしょうか？

「所でこの先の川を渡るつもりなのかしら？」

「この先に人がいるならどこまでも」

「分かったわ。小町、船を出すわよ」

「え？ でも生きてるんだから乗せたら」

「大丈夫よ。通行許可書を発行するから」

「……………分かりました」

まさか生きているうちに三途の川を渡るなんて思いませんでしたね

……

「それじゃあ出すよ」

そつと、岸部を離れて船は出された。

新たな戦いと彼岸の死神達（後書き）

「……………」

2人の鬼は呆然としていた。

まさか、生身の人間に。

しかも、肉弾戦で負けるだなんて考えられなかった事態だ。

「…………あの子達、怖かったな…………」

「人間じゃないよ…………」

「何だよあれ…………途中からあの子達木を抜いてきたぞ。木だぞ!？」

美穂と真由子は日々成長しているらしい。

主に力的な意味で。

は楽園の閻魔と共に過去を見つめ直す

ギィ……

静かに渡る船。

川に波紋を残してゆつくりと幻想的な空間を進む中、私はパソコンのキィを叩いていました。

「レイ……そもそも何で私にこんな事を頼むんですか？ 私なんかよりも霊夢さんや紫さんとかに頼んだ方が良いと思うんですけど……」

「そう言うのは絵里に頼んだ方が適当な物を確実に作ってくれるから好きなのよ」

「……それはどうも」

カタカタ……

「何を作ってるんですか？ さつきから……」

「術式らしいわ」

「らしいわって……作らせてるんじゃないんですか？」

「無理矢理ですけどね……酷い物です。少しは労うとか、そう言う事をして欲しいですね」

「絵里だからこそ労わないのよ」

地味に酷いですね……

「そつちがその気ならこつちも本気出しますよ」

「私が悪かったです、反省してます」

「流石姉……」

まあレイの弱点くらいわきまえているつもりです。

そうでもしなければ勝てそうにありませんし。

「つと、そろそろ着くよ」

「白、降りるときには気を付けて下さいね？　じゃないと落ちますから」

「いくら何でもそんな下手な……」

「じゃあ降りるわよ」

グラッ

「わっ!?!」

「ちよっ!?!」

バツシャンツ!!--!

案の定落ちる白。

そしてそれに巻き込まれた私。

間一髪でパソコンを上へ上げ被害は少なく、それと同時に偶然の如く白を助けられた様子。

三途の川は落ちてしまつと浮かばないので浅瀬だったことも幸をなしてか、私が少しだけ腕を更に捻るだけで被害は収まった。

ただその腕が動かさないように、と注意された腕でなければ。

「っあ!？」

「え？ 絵里さんっ!？」

今まで奇跡的にと言っても過言ではないほどにダメージを受けてこ
なかつた私の腕。

今回ばかりは奇跡も長続きしなかつたらしく激痛が腕を襲います。

「……………何があつたの？」

「……………怪我、しました……………衝撃、与えたら……………めっ、って……………」
「絵里、熱あるんじゃない？」

私がこういういい方するのは余程の事があつたときだけなので、流
石のレイも心配してくれているご様子。

「絵里さん、大丈夫ですか？ というか私のせいで……………」

「!……………大丈夫です。これ位……………大袈裟に言い過ぎましたね」

心配をかけては行けない。

此処に来たときから、ずっとそう思っていたのに。

「白は気にしないで下さい」

……………私は、今どんな顔をしているだろう……………

白side……………

……………

「白は気にしないで下さい」

その言葉だけが私の頭の中で繰り返される。
気にしないで。

そんなの無理に決まっている。

いつもの私だったら「なら良いんですけど……」で済ませるかも知れない。

でも、何でこの人は 絵里さんは

辛そうな顔をしているんだろう。

腕の痛みだけじゃない。

他に何かがある、そんな顔。

「……………絵里」

「……………大丈夫ですよ、レイ。腕の痛みなんて吹き飛んじやいましたから」

「……………そう」

レイさんは何か知っているのだろう。

けれど、私は。私達は何も知らないのだ。

「行きましようか。立ち止まっても先には進めませんし」

「それもそうね。小町、こっそり逃げようとしていないで一緒に行くわよ」

「……………ひゃー」

いつの間に……

ゆっくりと進んでいくと立派な門が見え始めた。

あそこがどうやら地獄の裁判所らしい。

そしてその門に続くように長い行列が出来ていた。

「そういえば映姫様は今暇なんですか？」

「丁度さつきに交代したから暇なはずよ」

屋内に入っていく。

そしてとある部屋の前で立ち止まってノックをした。

「どうぞ」

「失礼します」

そこにはいつもの映姫様がいた。

「あ、レイさんに小町。それと白に……あなたは今噂の……」

「……音橋絵里です」

「私は四季映姫・ヤマザナドウです……ふむ」

絵里さんを暫く見て、そして映姫様は口を再び開く。

「少しの間、音橋さん……いえ、絵里さんと2人きりにして貰っても構いませんか？」

「絵里は？」

「……構いませんよ」

「それじゃあ私達は退散しましょう。小町は私が叱っておきますので……ごゆっくり」

私が状況を掴めないまま、映姫様と絵里さんを残して部屋の扉は閉められた。

絵里 side

「……………」
「……………」

「気まずい。」

「それが今思ったことだった。」

「取りあえず座って下さい」
「は、はい」

閻魔様の前にあった椅子に座る。

「どこかぎこちない動作ではある物の、気にしない方が得策だと思
私は無視した。」

「……………あなたは一体何なのですか？」

そして、一気に核心を突かれた。

レイと、私と、トモちゃんしか知らないその闇を。

無造作にその手に持った懐中電灯で照らされたようだった。

「……人間ですよ」

「それ以前の話しです。何故前世の記憶を？　そしてあなたは何に縋り付いているのです？」

小さなヤマザナドウ　楽園の閻魔に問いただされる。

その通りだった。一体私は何に縋り付いているのだろう、私は。

「……まずは1つ目の質問に答えます」

閻魔に隠し事は出来ないのだから。

「私は前世で普通に生きてきました……ある日車道に飛び出した女の子を助け、死に至るまでは」

そこからはもう話は早い。

暇つぶしで死んだと言い放たれ、私は私自身で能力を授かり世界に渡った。

ただそれだけ。

「……前世も今も、捨てがたいと？」

「……そうですね。前世は前世で、私だってそれなりに生きてきたつもりです。家族だっっていましたし、親友だっただけ友達だっただけ。未練がないといえば嘘になります」

でも。

「いつしか今を過ごすたびに、前世の事を忘れそうになるんです…

「それが何より怖かった」

日々を過ごしていく。

とても楽しい日々で、ふと。1人になったときに気付いてしまう。

前世では、私は何をしていた？

友達と買い物に行ったり、お喋りをしたりしたはずのその記憶が薄れていく。

消えてしまう。

私と前世の人達との、たった1つだけの繋がり。

それがみるみる消えてしまう。

ほんの僅かに残った記憶を頼りに思い出そうとしても思い出せない。
あるのは今の記憶ばかり。

前世に縛られて今を生きられ無いだなんて、愚かで愚直で滑稽で馬鹿なことだと分かっている。

それでも恐れ、手放したくないと泣け叫び、拳げ句の果てには今も前世も選べないまでに追いやられてしまった。

「きっと私は駄目なんです。だから、壁を置いて人と接することしかできない。勝手な決めつけだと分かっている、私はこうすることとでしか私を保ってられないんです」

勝手な決めつけ。

自己満足。

そうだと分かっている、そうしないと、私は私でいられなくなっ

てしまいそうだった。

「……あなたは少し、自分勝手すぎる」
「ふえ？」

そこで閻魔が口を開いた。

「周りがあなたをどれだけ思っているか、あなたは考えたことありますか？ 自分で決めつけていても、他人から見ればそう思えないことも多々あります。あなたは少し周りのことを見た方が良い。周りがどれだけあなたを必要とし、慕い、大切に思っているのか……今一度考えてはどうですか？」

……

ヤマザナドウ。

楽園の閻魔とはよく言った物ね。

「ふふつ。ありがとう、楽園の閻魔様。御陰で少しだけもやもやが晴れたような気がするわ」

「それがあなたの本当の口調ですか？ 意外に普通ですね」

「あれ？ 嫌味？ でもまあ敬語の私と比べたら普通かも知れないわ。自分ではよく分からないけど」

私は向き直って深く頭を下げた。

「感謝するわ、楽園の小さな閻魔様。あなたの御陰で、あの時思ったことを後悔せずにすむようだから」

子供を助けたこと。

あの子は今、元気に生きているだろうか。

あの雪のクリスマスの日。

私が漸く、0から1に踏み出していたことに気付いた日。

今私は踏み出せているかな？

「……白にもあなたの様に前向きな性格があればいいのですけどね」
「白の過去？ ある程度あの様子からすれば分かるけど……人の持つている勇気は本当に人それぞれよ。あの子にはあの子なりの勇気の出し方や踏み出し方がある」

「閻魔にでもなりますか？」

きよとん、としてしまう。

そんなこと、考えたこともなかった。

でも

「お断りするわ。私は自由気ままに生きていく。昔も今も、これからもね」

さて……

「それじゃあ取材をお願いするわ。それが今の絵里の仕事だから」

きよとんとした顔を一瞬見せ、そして閻魔は笑顔で

「……分かりました」

と静かに答えた。

白 s i d e

「くしゅんっ!?!」

「噂されているみたいね」

「うー……」

どうもさつきから噓うそが良く出る。

レイさんに笑いながら言われ、強ち間違いではないかも知れないと
内心思いつつ苦笑いを返しておいた。

ガチャリ

「お待たせしました」

「取材も終わらせておきましたよ」

「流石ね……」

「用意周到……」

流石絵里さん。ぬかりないな……

「……あれ？」

「？　どうかしましたか？　白」

「いや……絵里さん、何かスッキリしたような顔をしてるから……何かあったんですか？」

すると、絵里さんは少しだけ驚いた顔をしてから笑った。

「白も変なところで鋭いんですね。そうですね……強いて言えば、ずっと解きたかった問題のヒントがたった1つだけみつかっただけです」

「よく分からないけど……良かったですね」

「はい。だから白も耐えなくて良いんですよ？」

……バレてたのかな……

「何のことですか？」

「……さあ。何のことでしょうかね？　さ、早く次に行きましょうか」

「あ、私は暫く此処にいるわ。仕事があるし」

「あ……」

そう言えばレイさんは……

「あ、あの……もしかして私って邪魔ですか？」

「？　何で……レイ？　嘘を教えましたね？」

「あ、ばれた？」

「え？　嘘……？」

説明受中……………

「じゃあレイさんは死んでないんですね」

「まあ取りあえず生きてはいるわ」

「私の早とちりでしたね……………」

「まあまあ……………それじゃあ晴れて誤解も解けたところですし、行きますか」

残る最後は白玉楼。

……………なんか、行きたくないって思っちゃうのは何でだろう。

そう思いながら、私と絵里さんは映姫様達に別れを告げて冥界への道を歩き始めた。

絵里 s i d e

取材を終えた後、あの閻魔は私に聞いた。

「今に満足していますか？　そして……………あなたは本当に、何者なんですか？」

世界にはどんなに祈っても拜んでも願っても望んでも、叶わないことがある。

私の場合、それは死だった。

逃れられない結末。

私如きでは変えられないであろうその結果。

私に訪れた終焉はあまりに唐突で、

あまりに不幸に苛まれていた。

神に、2度目の人生を与えられた。

私自身が決めた世界だ。悔いはないはずだった。

でも、前の世界への未練が捨てきれなかった。

まだ、生きていたかった。

いつもの日常を過ごす。

機械的な日常でも、ほんのひととき。

ほんの一瞬に咲き誇る感情は変わらないのだから。

「世界には知っては行けないことと、どんなに望んでも叶うことのないことが存在します……」

そう、私は答えた。

人には隠したいことがある。

私にとって、それは異端であること。

異端分子である私がいて良い世界は何処かにあるだろうか？

今の世界が、

前の世界が、

選ぶのは私だ。

けれど、やっぱり少し怖い。

選ぶことによつてどちらかを切り捨て、見放し、裏切るよつで。

死屍が裂け、内蔵が溢れ出し、その中からドロドロとどす黒い血が流れるように、

奇跡は起こりえないのだと。

昔、彼女は。

彼は。

私は。

あなたは。

言ったのだ。

その通り、世界に奇跡なんて起こるはずもなく、私達は死という輪
廻りに振り回されながら生き続けるのだ。

は楽園の閻魔と共に過去を見つめ直す（後書き）

川着水時より数分後の歩いているとき。

「絵里さん、大丈夫ですか？ 本当にすみません」

「いえ、気にしないで下さい。私の不注意でもありますから……」

「風邪引いちゃいますよ？」

「半分人間の白も引く可能性は十二分にありますよ？」

「いえ、私は平気です。慣れてますから」

「なら私も慣れてますよ？」

「いえ。私は尻尾があつて冬場も暖かいですけど絵里さんはありません。故に絵里さんの方が今体温が低いことになります。だからさつさと服を脱いで下さい」

「待つて白それ可笑しい」

「良いから脱ぎましょう。風邪引きます。本当に」

「いや、だからそれ可笑しいですって。それなら白も脱ぐことになりますよ？」

「脱げばいいってモンじゃないです」

「それ著作権問題に引っかけりませんか？」

「兎も角。早く脱ぎましょう」

「だから、それなら白も」

「2人とも言い争いは止めて着替えたら？」

「「良いからレイ（さん）は黙ってて下さい」」

「あはは。青春だねえ」

その後、そんな言い争いが裁判所に着くまで行われたという。

宴会っ！　そして酔っぱらいは貞操を狙い始め（ry

白玉楼。

死を誘う妖の桜、西行妖が植えられており、大量の霊が浮いている。

階段はこれでもかと言つほどに長く、暗かった。

そして今現在白玉楼目の前。

レイはまだ仕事があるからと言い残して何処かに消えてしまい、案の定私と白だけが此処に来た形になりました。

「あれ？　白……と、確か噂の……」

噂って、凄く広がりやすいですね。

「初めまして、音橋絵里です」

「私は魂魄妖夢。白玉楼の庭師です」

庭師……にしては

「腰に良い物を携えているようで」

「！　分かりますか！　この楼観剣と白楼剣が」

「まあ少しばかり」

「……私には普通の刀に見えますけど……」

白がそう呟く。

そうですね。見た目はただの刀ですから……

「随分と大切になさっているんですね。良いことです」

「……ですが、私はまだ半人前です。この刀の本当の力を使いこなせているのかどうかすら……」

……確かに。

魂魄さん……いえ、妖夢さんはうまくこの刀の力を使えていないようですね。

……成る程成る程。

「少し触らせて貰っても？」

「構いません。どうぞ……」

2つ受け取り、1つの刀を抜いて触る。

そしてしまい、もう1つの刀を抜いて触る。

「はい、ありがとうございました」

2つの刀を返す。

これで漸くこの刀のことが若干分かった。

「まだあなたはその刀の真意を理解していないようですね」

「……」

「大丈夫ですよ。あなたもきつと何れ気付きます……あなたの師の
ように」

「！」

「さ。知りたいことは知りましたね？ では今度はこちらの番です……白、ぼーっとしてないで、さっさと済ませてしましょっ？」
「あ、はい」

取材中……

「とまあこんな感じですね」

「分かりました……ありがとうございます。それと敬語は別に良いですよ？」

「すみません。癖です」

「私と同じでしたか」

「正確には私達と同じ、ですね」

敬語3人組。

仲良く談笑を交わす。

あ、でも。

「私は頑張れば敬語じゃなく出来ますよ？」

「え。見てみたいです」

「私も些か興味がありますね」

えーっと……沙織沙織沙織沙織。私は沙織。佐藤沙織。

……よし。

「こんな感じになるかな」

「……新鮮すぎる……！」

「何か可愛らしいですね」

「あはは。妖夢さんの方が可愛いですよ？」

「ご謙遜を。私よりも絵里さんの方が可愛いですよ？」

「いえいえ。妖夢さんも白も可愛いですよ？」

「私よりも絵里さんと妖夢さんの方が可愛いですよ？」

「……え、永遠ループ……」

「兎に角その事はやめにして、あなたの主人に会わせて頂けますか？」

「あ、分かりました。着いてきて下さい」

私達は妖夢さんの後ろを着いていきます。

「敬語何ですね、絵里さん」

「白が敬語な理由と似たような物かも知れませんが……あるいは他の理由かも知れませんか？」

「……」
「……そうですね、白なら……」

私はそう考え、耳元でこつそり呟きます。

「知りたいなら、レイに聞いて下さい。私では些か感情が高ぶってしまいますから」

「……良いんですか？」

「その代わり、私も少しなら知る権利はありますよね？」

「……分かりました。またいつか帰る前に」

「ええ」

そうこうしているうちに1つの部屋の前に。

「幽々子様、白とお客様です」

『入ってー』

「失礼します」

招待された部屋の中にいたのは桜色の髪をした女性。

空色の着物を身につけており、頭には変わった模様が描かれた帽子。

「初めまして、変わった人間さん」

ああ……

「初めまして、変わった亡霊さん」

この人には、どうやら分かるらしい。

「？」

「ああ。白はあまり知らなくても良いと思います……どうせ後で分かりますし」

「あら白。いらっしやい」

「お、お邪魔してます……」

どうやら白は分からない様子。

うーん……

「コレは何て言うか……」

「腹のさぐり合いのような物よ」

「ああ。それですそれ」

「絵里は宴会とか好きかしら？」

「幽々子さんは……好きそうですね。私は騒がしいことはあまり好き
きな方ではありませんが……」

そう、騒がしいのは嫌だけど

「……賑やかなのは好きですよ？」

「決まりね。時間も頃合いだし……行きましようか」

「「？」」

疑問符を浮かべる私達に、幽々子さんは満面の笑みで答えた。

「博麗神社の宴会よ」

ああ。成る程。

私達は苦笑いをこぼした。

博麗神社
.....
.....
.....

「それじゃあ新たなる友を祝してー!!」

『
かんぱーいッッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

神社に明るい声が響き渡る。

ぼんやりとでは無く、明るい炎の光に柔らかく照らされながら、私達は自分の器に注がれた飲み物を口に含んだ。

未成年なので、お酒は程々にというか飲まないように。

「絵里ー！ 飲みなさい！」

「つと！？ れ、霊夢さん！？」

「白も飲めー！」

「ま、魔理沙さん！？」

はあ……

「私達は遠慮しておきますね」

「下戸ですから……」

「「良いから飲めー！！」」

「「もう酔っぱらってる！？」」

まさか早々と出来上がるなんて……

「失礼ね。まだまだ行けるわよ」

「そうだぜ？」

「なのに何故にハイテンション」

殺気！？

私はぱつと立ち上がってその場から離れるべく第2の行動を

「「確保オオツ！！！！！！！！！！」」

「いやああああ！！！！！！！！！！」

抱きついてきたのは2人。
服がボロボロで、どう考えても死線をくぐり抜けてきたとしか言い
ようのない熟練した動き。

「美穂、真由子……」

「絵里よっ！！ やっぱリエデンは此処にあつたわッ！！」

「美穂！ コレまで鬼やらフラワーマスターを相手にしたのは地獄
だったけど、やっぱり天国は此処にあつたんだよねッ！！」

……些か、仕方ありませんね。

お酒の酔いが1度だけ回るように工夫して……

「靈夢さん、お酒を頂けますか？」

「え？ あ、はい」

さてと……

ごくり……

「美穂？ 真由子？」

「何？」

「1回休みです」

「へ？」

すつと力無くして倒れる2人。
それを見て酔いを止めます。

「ふう…… コレはやっぱり疲れるからあまりやりたくありませんね

……」

「絵里さん……今のなんですか？」

「まあ……自然と身に付いた自分の身を守る力です……私の身の回りには危険がたくさんあるので」

主に貞操的な意味と命的な意味で。

「大変ね……絵里も」

「まあ頑張れ」

「いや、それよりもこの2人、さっき鬼とフラワーマスターを相手にしたって言ってますでした？」

「……気にしたら負けだと思っ」「……」

「……そうですね」

因みに私はもう気にしてません。

「さて、と……」

しゅるつと2人のネクタイを外し、手首に巻き付けておきます。その後その近くの木に2人揃って寝かせて……

「後は鎖か縄ですね……面倒ですが両方で縛っておきますか」

「いやいやいや、可笑しいですよ？ 絵里さん」

「私がいつでも猪突猛進を受け止められるとお考えですか？ 流石に無理です。そのうち骨を折ります」

「……手伝います」

「私も手伝うわよ」

「私も手伝うぜ」

4人がかりで2人を縛り上げ、取りあえず一安心。

「ありがとうございます」

「気にしないで頂戴。後でお賽銭してくればいいから」

「お賽銭ではなくお布施では駄目ですか？」

「絵里、私あなたのこと大好きよ」

「わぷっ!？」

ガシッと抱きしめられる私。

あの、その、えっと……???

「絵里の顔が赤くなってるぜ？」

「え？……なんか可愛いわね。白と同等じゃない？」

「……私は元から2人狙いだぜ」

「何の話ですか……？」

火照った顔を手ではたばたと仰ぎながら、私は雑念を抜きます。

あれは別にアレですコミュニケーションとか言う奴ですよ別にいつも突進とか拘束とか薬とかアイアンクローとかサブミッションとか受けていてあぁやって普通のことをされるのが少し恥ずかしかったとかそういう事じゃなくて普通にそのあれですあれちよっと嬉しかったって言うかああああ違いますそれじゃあ私に変態じゃないですかあれですやっぱり恥ずかしかったです本当にごめんなさいだからあのその顔が赤いのは気にしないで下さいいいいい!!!!!!

「大丈夫ですか？」

「はっ!？ 白……ありがとうございます」

「いえ……慣れました」

「その慣れはすぐに消えますよ。多分」

はあ……

「絵里ー！」

聞き慣れた声。

再び現れたその影に、私はまたも抱きついた。

「レイ！ つい6時間ほどぶりですね」

「ええ。久しぶりね……姉さん」

……はえ？

「レイ？ 熱でもあるんですか？」

「ノリで言っただけよ……」

姉さんって……

でも、少し。

少しだけ……

嬉しかった。

「レイ、もう一回」

「嫌よ……恥ずかしい」

「自分から言っておいてそれはないでしょう……というか恥ずかしいって……」

「絵里、誰だ？ 其奴」

「あ、紹介しますね。私の妹ナンバー1のレイです」

「音橋レイよ。宜しく」

「霧雨魔理沙だ」

「博麗霊夢よ」

やっぱり身内がいると落ち着きますね。

「ナンバー1って事はナンバー2がいるのか？」

「いますよ？ 3姉妹です」

「ただし音橋3姉妹って呼ぶのはNGよ」

それだけは遠慮したいですからね。

そもそも一纏めにする事自体失礼ですし。

「ちょっと良いかしら？」

「？」

後ろを振り向くと、そこには緑色の髪をした女性。瞳は深紅。

「その2人の人間の息の根を止めさせてくれるかしら？」

「是非ともお願いしたいところですがこんな変態でも死んだら哀しむ人がいるし、何よりその後ろの閻魔様が怖いので何卒お許し下さい」

「閻魔!?!」

彼処にいるじゃないですか。

ほら、ちょこんと死神と共に。

「……息の根を止めるのはやめておくわ」

「ありがとうございます」

「……で。あなたが音橋絵里ってワケ？」

全く……

「本当にこの度はこの変態達にご迷惑をおかけしました。この後帰ったらぼつきりお話ししておくのでご安心下さい」

「主に首の骨を？」

「もとより首の骨と頭蓋骨と脊髄をぼつきり行く予定ですので」

白side

「本当にこの度はこの変態達にご迷惑をおかけしました。この後帰ったらぼつきりお話ししておくのでご安心下さい」

「主に首の骨を？」

「もとより首の骨と頭蓋骨と脊髄をぼつきり行く予定ですので」

何をこの人達は爽やかな笑顔で言っているのだろう……

そもそも話しは“じっくり”であって“ぼつきり”では無かったはず……

「それじゃあそう言うことで……取材をお願いしても？」

「構わないけど……私もあなたに興味が湧いたわ」

きよとん。

そんな擬音が似合うだろうか、私は少し驚いた。

そしていつもの笑顔を浮かべる。

「私に出来る範囲なら構いませんよ」
「そう」

宴会はまだ、始まったばかり。

宴会っ！そして酔っぱらいは貞操を狙い始め（ry）（後書き）

ざわざわざわざわ……

「ねえ真由子」

「何？ 美穂」

「絵里のあんな笑顔見るの初めてだね」

「……そうだね」

「何で絵里なんて好きになっただんだっけ……」

「んー……何でかなー」

「「ふふっ」」

分かり切った事だった。

私が、私達が絵里を好きになった理由。

あの笑顔に引かれたから。

ただどたまにあの子が見せる暗い表情が嫌いで、自分まで悲しくな
って。

だから決めたんだ。

いつの日からかは忘れたけど……例え、どんなに他人から拒絶されようと、絵里に拒絶されようと。

あの笑顔は。

守り抜いてみせるって。

「杞憂だったね……絵里が泣いてると思って此処まで来たのに」

「そうね……でも良いじゃない。あんなに笑ってる絵里が見られたんだし」

「そだね」

「あー。ムラムラするっ」「」

「（ゾクッ）な、何ですか……悪寒が……」

2人の想いが知られるのは、そう遠くはない未来かもしれない。

最後の宴はまだ続く

先ほどの女性……風見幽香さんと話し合ったりし、気が合う事に驚かれつつも宴会は更に最高潮を見せていました。

「それにしても白の周りにはいつも誰かいますね」

「引き寄せるのがあの子の魅力といっても良いからかしらね」

「ひゃっ!?! 紫さん……お、驚かせないで下さいよ……」

いきなり後ろに現れたのは八雲紫さん。

あ。そうだ……

「紫さん。コレはお返ししますね」

「? ……ああ。笛ね」

そう。あの時貰った笛だ。

コレを使う機会はまだ無かったけれど……いや、大いにあるんだけど。

まあ、使わなかったので返すことにした。

「別に良いわ。私からの贈り物と思ってくれて構わないし」

「そうなんですか?」

「ええ。スペカも持って帰ると良いわ。きっと向こうの世界でそれは紙切れ同然でしょうし」

「そうですか……では貰える物はありがたく受け取っておくとしま

すね

「ええ」

笛をポケットの中にしまえます。
つと。

「それじゃあ楽しんで行きなさい。最後の幻想郷らしいじゃない？」

「……それもそうですね」

これが最後なんだ。

時間ぶっ続けで気付きづらいけれど、「コレでもう時間は過ぎてしま
うのだ。」

……長いようで、短いですね。

「あ。そうそう」

「？」

「私の式を紹介するわね」

式……ああ。

そう言えば紫さんには式がいて、その式には更に式があるって話し
でしたね。

「藍、橙。いらっしやい」

呼ばれて出て来た人の印象はまず尻尾。

金色の尻尾が9本。

俗に言う九尾という幻獣だろう。

そして綺麗な毛並みの尻尾が2本と耳。

俗に言う猫又だろつ。

「紫さん、こちらが？」

「ええ。藍、橙」

「八雲藍です。紫様の式を務めています」

「ち、橙です……藍様の、式です……」

「初めまして。音橋絵里です」

ペコリと一礼をする。

「で。この後には何をすれば？」

「取材の材料は私が渡しちゃった物ね……まあ、顔合わせだけって感じになるのかしら？」

「……………そう、ですか」

何を考えているのか分からない。

「紫……………つて、あら。変わった人間さんじゃない」

唐突にひょこりと現れた桜色の髪。

「変わった亡霊さん。名前で呼んで下さいよ」

「絵里……………だったかしら？」

「そうですよ、幽々子さん」

そう。

現れたのは幽々子さんだった。

片手にはお団子を持っていて、どう考えてもお嬢様のすることじゃないと思っただのは秘密だ。

……私、人のこと言えないですし。

「どうかしたの？ 幽々子」

「紫と飲もうかと思って……でも、丁度良かったわ。絵里に聞いた
いことがあったのよ」

「？ 私にですか？」

「あら。奇遇ね。私もよ」

紫さんと幽々子さんが私に質問？

……何かしたっけ？

「あなた、はっきり言って何なのかしら？」

2人が声を揃えて、あの閻魔と同じ事を聞いた。

……ああ、そう言うことか。

ふと遠目で見れば、閻魔もこちらを静かに見ていた。

……閻魔が盗み聞きですか？

「……そうですね。冥土のみやげとまでは行きませんが、言っても
良いかも知れませんね……」

今まで目を背けていたことに、しつこく聞かれれば私だって応じる
事もある。

「白に伝えておきます。なので白から聞いて下さい」

「自分の口からは言えないって事かしら？」

「それもあります……皆さん白が好きならコレで会う口実が作れ
ますよね？」

「うん。ありがとう（良くできた子……！！）」
頭を撫でられる。

ふっ。大丈夫。もう恥ずかし無いよ？

だってこんな柔らかい感触なんてたかだか手のひらだけって言うかこの歳で頭を撫でられること自体が少ないから不慣れってワケでもないって言うか内心嬉しいって言うかああでもやっぱり恥ずかしいや恥ずかしくない恥ずかしくないもう慣れたから大丈夫大丈夫だからそのまた顔が赤くなるとかないはずだから大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫本当にいつも綺麗なお花畑を見させられているからこういうのに耐性がないだけだからうん本気で耐性が無いだけだし別に変なことを考えていないしセーフだと思っんだ余裕でセーフだよん！！！！！！

「こ、これは……（反応だけに置いては白を抜くわね……！！）」

「っ……（白とダブルで置いておきたい……白はどこ！？）」

と、取りあえず深呼吸……あれ？ 息ってどうやってするんだっけ？

何とか落ち着くことの出来た私。

きつと顔はまたも赤く染まっていることだろう。

「絵里も一緒に飲む？」

「ふえ？ あ、いや……白と一緒に飲む予定です……？ / / / /

「 /
「良いわね、行ってらっしゃい（酒の肴になりそうね……）」

？

「それじゃあ失礼します」

「ええ」

「またね」

軽い挨拶を交わし、私は白の元へと戻ろうとする。

が。

こういうときに限ってありとあらゆる人に捕まる物だ。

「絵里ー！」

ふと聞こえてきた朗らかな声。

そして私がオンラインで対戦していた相手でもある人物……

「ぐーや！」

「久しぶり……でもないけど久しぶりね！ ルンパルンパソウくてありがと」

「ルンパルンパソウって結構珍しい物ですけど、コツを覚えると手に入れやすいんですよ」

「へー」

「まあ、そんなに使わないんだけどね（ですけどね）、ルンパルンパソウ」

ルンパルンパソウは私達のオンラインゲームの中のアイテム。
ルンパルンパソウの役割は……

相手をルンパルンパさせること、らしい。

なので手に入れるにはとある手段を踏まなければ行けないし、希少価値もある。

けれど使い道は全くない。

唯一あるとしたら魔王をルンパルンパさせることだ。

「よくよく考えれば凄いアイテムなんですけどねえ……………」

「ただど使い道がね……………売るしかないわ」

その言葉にこくりと頷き、ゲームをしまい込みます。

「それにしてもぐーやは何で此処に？」

「宴会よ。たまには息抜きと……………外に出ることも必要だってえーりんが」

「永琳さんが？……………えーりんって呼ぶと怒られますよ？ えーりんだって」

「良いのよ。えーりんはえーりんだもの。えーりん以外の何者でもないわ」

凄い論法ですね。

「絵里さん」

「白」

「お」

お？

ぐーやの発言に若干の謎を抱きつつも、私は白に視線をずらしします。

「遅いから心配しましたよ……………」

「すいません……………少し、絡まれていましてね……………？」

白side

戻ってくるのが遅い絵里さんを鼻で見つけ、私は駆け寄った。

「遅いから心配しましたよ……」

「すみません……少し、絡まれています……?」

隣には輝夜さん。

……ということは他の人にも絡まれていたのだろう。

ほんのり顔が赤いことには突っ込んだ方が良いのだろうか……?

「んー……今日で帰るんだっけ、絵里」

「そうですね。本当はまだ帰りたくありませんけど……今回を逃すと暫く帰れそうにないので」

「ふーん……私は一旦戻るわね」

「あ、はい」

「またあとでねー」

そう言って戻っていくぐーや。

そして直後……

ゴオオオオッ!!!!!!!!!!

浮かべていた。
むう……手強い。

「もしかして絵里さんって天然ですか……？」

「そういう白も天然ですか？」

「そんなはず無いです」

「……私は白ほど酷くありませんよ」

そんなに私は酷いのだろうか……？

自覚がない……のは酷い傾向だつて聞いたことはあるけれど……いや、私に限ってそれはないだろう。

「……さて。白？ 絵里？ 攫われる準備は良いかしら？」

「何か色々とぶつ飛んだ言葉が聞こえてきた……！？！？！」

ぱつと後ろを振り向く。

そこにはメイド服に身を包んだお馴染みの人がいた。

「あ、咲夜さん。お久しぶりです？」

「まあ、強ち間違つてはいないような気もするけど……まあ久しぶりね、絵里、白」

どうしてナイフを片手に持っている咲夜さん相手にそんな対処ができているの……！？

「絵里さん、やっぱり天然です」

「白にだけは言われたくないです……それにナイフの件ならもう気付いていますよ。慣れてるだけです」

慣れて、凄いですね。

絵里さんが来てから改めてそう思えた事だった。

「それじゃあ来てくれるかしら？ 2人とも」

「まあ私は構いませんよ？ 白はどうですか？」

「いや、正直行きたくない 嘘です嘘です！ すっごく生きたいな
！……！」

因みに誤字ではない。

「それじゃあ行きましようか」

「そうですね」

「……逝きましよう」

「あの、白？ さっきから本当に字が違いますよ？」

仕方がない。

私自身いつもレミリアさんや霊夢さんや紫さんや他の人に振り回されているんだから、拒否したくなる気持ちはいくらでもある。

……あれ？ 安全な場所って、無い？

「？ どうかしたんですか？ 白」

「……手、繋いでも良いですか？」

此処にあった。

すぐ近くにあった安全な場所。

そこに何故か、もう姿を見せない母を思い出してふと言ってしまった。

「あ、いや……えっと……」

「？ 構いませんけど……それじゃあ、はい」

そつと差し伸べられた手。
何故だか戸惑っていた自分が恥ずかしいほどにあっさりとし差し伸べられてしまった。

……

そつと、触れて握ってみた。
温かくて、柔らかくて。

最近手を握る以前の問題だし、何よりあちらが勝手に手を繋いできている。

私自ら求めたのは初めて何じゃないだろうか？

「……絵里、私も手を繋いで良いかしら？」

「咲夜さんですか？ まあ、構いませんが……」

珍しい。咲夜さんが誰かと手を繋ぐなんて……

「白とはまた今度手を繋ぐことにするわ」

「私ですか!？」

「白、手を繋ぐくらい大丈夫ですよ。命を奪われるわけではありませんから」

「……絵里も無理しないで常識を学びましょう」

「そうです。いくら何でももう少し常識を持った方が良いと思います」

「……学んでいるつもりなんですけどね……」

ぼそつとそんな呟きが聞こえてきたのはさておき。

前を向くともう少しと言ったところにレミリアさん達の姿が見えた。

フレンドールさんを連れてきている辺り、最近はずが良いのかも知れない。

「絵里ー！ 白ー！」

こっちに気付いたのか手をぶんぶんとこれでもかと言つほどに振ってくるフレンドールさん。

絵里さんにはこやかに笑い、咲夜さんは主人の前という手前もあつてか握りしめていた手を少し隠れる程度に後ろの方向に追いやつていた。

うん。絵里さんはその行動に疑問符を抱いているけどね。

「お久しぶりです、レミリアさん」

「ええ。白もね」

「はい」

「私はー？」

「フレんさんも元気そうぞ何よりです」

「えへへー」

にこやかに笑う私達。

それを見かねたレミリアさんが口を開いた。

「まあ、話があるのよ。大した話じゃないから聞いて行きなさい」

「はあ」

「？ 分かりました」

私達は頭の上に疑問符を浮かべつつも、レミリアさんに向かい合う

よつに座った。

最後の宴はまだ続く（後書き）

「白は恋愛をしたことはありませんか？」

「いえ、ありませんね」

絵里さんの唐突な問いかけに、私は素早く答えた。

こんな場所で恋愛を出来る方が可らしい。
というか好きな人がいないだけか。

「絵里さんは好きな人いるんですか？」

「許嫁がいます」

『 『 『 『 『 嘘ッ!？ 『 『 『 『 『

「ひゃうっ!？」

ただでさえ驚きの事なのに、みんなで声を揃えていった物だから絵里さんが変な声を出す。

「いいいいいい許嫁!？」

「とは言っても親が決めたものですから……私としては良いお友達程度にしか……」

「（まだ入り込めるわね……）」

「（諦めないんだから……）」

等と、人妖問わず思っていたらしい。

……白を除いては。

カルパッチョはカルパッチョ故に恐ろしい

「あなたには本当に感謝しているわ」

レミリアさんの目の前に座っての開口一番が、レミリアさんのお礼だった。

いや、日本語が若干可笑しいけれど、本当にレミリアさんが私にお礼を告げた。

「え、つと……」

「フランの事よ。あなたと闘って以来」

何だろう？ まさか狂気が収まったとかはあり得ませんよね。

「あの子、カルパッチョを見せるだけで狂気が引っ込むようになったの」

余計に酷かった。

寧ろ、狂気が収まったとかその方が良かったとさえ思えてきます。

「いや、あの……すみません」

「私はお礼を言ってるのよ？」

「いや、でも……いえ、何でもありません。どういたしまして」
そらした目線を戻すとレミリアさんがとても清々しい顔をしていた。それだけでもう、私は何も言うことが出来ないんですよね……恐ろしくて。

「あの子は、今までずっと外に出ることが出来なかったから……でも今なら安心ね。霊夢も魔理沙も白も絵里もいる。カルパッチョもいる」

カルパッチョは人ではありませんよ。

「だから絵里」

「はい」

「(ニコッ)(レミリア」

「(に、ニコッ?)」 絵里

「(に)にずっといない？」

「白、そろそろ戻りましょうか」

「えーりー??？」

私は再び座り直す。

べ、別にレミリアさんの後ろにいる咲夜さんの目が怖かったとか、
そう言うのじゃないんですからね！

……せめてナイフは、構えないで欲しかった。

「あなたには結構強固な運命があるんだけど……それを無視してま
で此処にいる気はない？」

「あり……………」

いや、少し待って。

よく考えたら向こうっていつか明久達のいる世界よりこっちの方が
良くないですか？

死ぬ危機は無い……………いえ、こっちも死ぬ危険性はあるのですが、少
なくとも料理で死ぬことはないですね。死ぬ理由は至極当然の理由
そうですし、こちらの方が代わりと安全……………かもしれない。

というか完璧にこちらの方が安全なよう……………？

……………いえ、自分で選んだ世界に勝手に別れを告げるなんてこと、許
されませんか。

「レミリアさんのお誘い、嬉しいです」

「じゃあ……………！」

「でも、今回はご遠慮します」

「……………理由を聞いてもいいかしら？」

理由……………か。

「それは、できません」

「……」

「私一人の問題ではありませんから……どうしても知りたいなら白に聴いてください。白が後で私の話を聞いて言ってもいいと判断したらきつと話してくれますよ」

「……まったく。私よりも口が達者ね」

「いつも戦争のことについてしか考えていませんからね」

「せ、戦争……？」

そう。

私の口の達者さは試召戦争で身についたと言っても過言ではありません。

ま、前世の経験からもきてますけど。

「ふーん……まあ、良いわ。あなたとは　絵里とはまたどこかで会える運命のようだしね」

「ではその際はぜひ私たちのいる世界へどうぞ。とびきりのものを用意して待ってますね」

「あら。楽しみにしてるわよ？」

「もしかしてそこには『麻月』とかいうメイドも？」

「麻月ですか……？　そうですね。位置的には咲夜さんと同じメイド長といったところですね」

「是非とも会ってみたいわね……」

同じ役職の、しかも同じ地位にいると知ってか咲夜さんの対抗意識は深まってしまった様子だった。

「それじゃあ私はこれで。美鈴さんとパチュリーさんとこあさんにもよろしくお伝えください」

「えー……帰っちゃおうのー？」

「今度は瑞希じゃなくて私が作ったお菓子を持って遊びに来ますよ。その代わり、今度はフランさんが来てくださいね？」

「……うん……」

涙を流しそうに眼をうるめるフラン。

これが、本当に狂気に埋もれていた吸血鬼だろうか？

いや、違う。

この子はただのフレンドール・スカーレット。

ああ、変わっている。

否。

成長した。

私では到底できないことを、この人はいとも簡単に　いや、それも違うか。

ああ、本当に今回は学ばされてばかりだな。

そう思いながら、私は向こう側で話をしている白に向けて、やさしく微笑んだ。

白 side

ふと誰かの視線を感じ取り振り向くと、絵里さんがフランさんを抱きしめてこちらを見ていた。

その顔はやさしく、慈愛に充ち溢れる聖母のように微笑んでいたにもかかわらず、私はどこかその笑顔にかけりを感じていた。

「白さん……？ まだ話は終わっていませんよ？」
「っ！！」

そうだった。一瞬だけこの人のことを忘れていた。

私の前に立っているのは聖母でも天使でもない……そう、悪魔だった。

「悪魔とは心外ですね……」

「こ、心を……！！？」

「顔に出ていましたよ……それに私はもともと悟り妖怪です」

そう。

絵里さんと地霊殿に行った時に会えスルーをしたさとりさんだ。

うん。仁王立ちをしているさとりさんの後ろから地獄の業火が見える。

「お姉ちゃん。もうそれくらいでやめてあげたら？」

不意にそういったのはいつの間にか現れたこいしさんだった。

その頬をあわく朱に染めていることから、すでにかかなりの量を飲んでいるのだろう。

「あらこいし。あなたが私の立場にいたらあなたはどつするのかしら？」

「多分本気で怒るね。うん良いよ、続けても」

「何故っ!？」

これはもう動物虐待じゃないだろうか。
もう誰でもいいから助けてほしい。

そう思った矢先。

「えーっと……」

「絵里さん!!」

私の前に天使が舞い降りた。

「白、人の趣味に私はとやかく言うつもりはありません」
「？」

「は、白がそれでいいのなら……どうぞ続きを」

「何言ってるんですか!？」

「ひっく……白が喜んでいるなら、続きをどうぞ」

待ってこの人天使じゃない。墮天使だ。

……ん? “ひっく”?

「絵里さん……? ではこの人が白と一緒に行動を共にしていた……」

「うん。そうだよー」

「……読めるけど、読めない……」

ぼそりと呟くさとりさん。
読めるけど読めないって……どういう事？

「っていうか、絵里さん？ まさかお酒を飲んだとかそう言うことは……」

「ひつく……れみりやと、さくちゃんに貰ったお水飲んだ」

「れ、れみりやと、さくちゃん……？」

紅魔館組のいる方向を見る。

そこには地面を真っ赤に染め上げていた2人が担架で小悪魔さんと美鈴さんによつて運び出されていた。

「絵里さん。これお水です」

「？ ありがとう」

「お酒つてやつぱり怖い」

あの絵里さんを此処まで変えてしまつたのだから、お酒はやつぱり飲まない方が良さだろう。

「こいし」

「イエッサー！！」

がしっ！

そんな擬音がするかの如く私はこいしさんに羽交い締めにされる。

「なっ！？ 何をするんですか！？」

「お酒、飲んでみましようか？」

「いやいやいやいやいや！！ 何処かの賢者様みたいな真似しないで下さい……！」

あのこと記憶にないのにお酒を見てはこっちを見てニヤニヤする紫さんが未だに憎ましいのだから。

「絵里さん、手伝ってくれませんか？」

「えーっと……？」

「古明地さとりです。取材メモはお渡ししますので宜しくお願いします」

「分かりました。それに面白そうですし」

「絵里さんッ！？」

「隙アリ」

「むぐうっ！？」

前も言ったかも知れないけど、お酒は嫌いだ。

まず匂いから駄目なのに………あー、ポーツとしてきた………

再び、記憶があるのは此処までだ。

霊夢 side

どうも地霊殿組の所が五月蠅かったので来てみれば………何この状況。

「さとり……アンタ一体何したの？」

「お酒を飲ませました……絵里さんは元から飲んでいたようですけ

ど……………」

「……………誤算だよね」

「白ー、くすぐりたいー……………」

「んー……………」

絵里に乗っかるようにして甘えている白。

それを心良しとして絵里は眠そうな顔をしている。

……………何コレ。周りの奴らが爆ぜてるじゃない。主に鼻血で。

「仕方ないわね……………絵里、白、こっちに来なさい」

「はい……………」

「むー……………」

ガシッ！ ガシッ！

「……………っ!?!?」

いきなり私に抱きついてくる2人。

酔っているせいで頬が紅潮し、何故か目まで若干潤んでいるというコンボ。

白は酔っているせいでいつもよりはしっかりと握っているというギヤップ。

絵里は弱々しく辿々しく手だけを……………その、恋人握りとか言う奴で絡ませてきた。

「……………」

「霊夢さん……………」

「何処か行かないんですか……………」

……よし。

「2人とも私の部屋に行きましようか。大丈夫。最初は痛いかも知れないけど徐々に快樂という名の海が」

「霊夢。抜け駆けは無しよ」

「……………チッ」

現れたのは紫。

全く……本当に神出鬼没なんだから。

しかも良いところに……夢想封印でも使った方が良いのかしら。

「霊夢？ 流れるようにスペルカードを構えないでくれないかしら？」

「自業自得よ」

「だからといって抜け駆けは良くないわ」

「……………分かったわよ」

渋々とスペルカードを仕舞う。

「取りあえず……此処は2人の酔いを醒ましましょう」

「分かったわよ……はあ」

酔っぱらった2人を連れて、私達2人は縁側に向かった。

この2人はどこまで行っても話しの中心になるのだろう……

そう考えながら、私は酔い止めと水を用意するのだった。

カルパッチョはカルパッチョ故に恐ろしい（後書き）

この度は遅れてしまいました……………が！

なんと！！ Ligerさんにハーレム話を執筆して頂くことが決定しました！

だらだら続いていくこの小説を、これからもどろどろひいきに…！

別れ

頭がガンガンする。

酔いが若干覚めたのは良い物の、私と白は頭痛に悩まされていた。

前にもこんな経験があったような……ああ、思い出せた。

アレは、清涼祭が終わったときの……

「いたたたた……絵里さん大丈夫ですか？」

「私はどうもお酒に弱いようです……」

「私もです……」

2人共々頭を抱えて身体を起こす。

宴会はもう既に酔いつぶれてきた人達も出始めていた。

「……白、風に当たりに行きませんか？」

「良いですよ」

ついでに、人気のないところで私のことを話してしまおう。

私はそう考えながら頭を抱えて歩いていった。

白 side

「ふー……頭痛も大分収まってきましたね」

「そうですね……後で紫さんを締めておきましょうか？」

「その時は白にお願いしますね」

あ。そう言えば絵里さんは今日で帰ってしまうんだっけ。

改めてそう聞かされると残念でならない。

絵里さんは私の心の拠り所……というか、もう唯一救いの手を差し伸べてくれる人なのに……。

「残念です……」

「そうですね……」

絵里さんは空を見て少し考えるような素振りを見せてから私を見た。

「それじゃあ約束を果たしましょうか」

「約束？」

「忘れたんですか？ 言ったでしょう、レイに聞いて欲しい、と」

そういえばそんなことを言っていたっけ。

けれどこの場にレイさんはいない。

「もうすぐ此処に、レイがやってきました。私は神社に戻って待っています」

「……分かり、ました……」

「終わったらもう1度此処に戻ってきます。その時に、白も……」

……

「分かりました」

それだけを言っつて、絵里さんは戻っていった。私は茫然と立ちつくしているだけだったけど。

程なくして、上からザツとレイさんが降りてきた。

「待たせたわね」

「いえ……」

「で、絵里の過去の話だったわね」

「はい」

曖昧な返事でしか答えることが出来なかった。

どんな辛い過去なのだろう、と。

勝手に思いこんでいるだけかも知れないけれど、そんな気がして。

「……話す前に、1度聞いておくわ」

「何ですか？」

「あなたに、絵里の話を書く覚悟はあるのかしら？」

その言葉だけが冷たく響いた。

明らかに私に向けられた若干の殺気に戸惑いつつも、私は頷いた。

「そう……」

少しの沈黙。

そして、レイさんはぽつりぽつりと話し始めた。

「絵里は、前世の記憶を持っているわ。所謂転生というのをしたの」

「ただ、その転生は普通の転生ではなかったわ」

「手違いで……………暇つぶしで、絵里の人生は終わったの」

「普通、それは許せない事ね」

「なのに絵里は、笑っているのよ」

断片的に語られる絵里さんの過去。

私は、黙って聞く事しか出来なかった。

……………

「白……………」

神社の縁側のみで、静かな空気が流れ出す。

周りは騒がしいのに、自棄に此処は静かだった。

「……………バカですよ、私。未だに、後悔しているのかも知れません」

「そんなこと……………っ……………そんなこと、無いです……………」

「いいえ。私はもう既に壊れているのかも知れません……………だけど、

ここに来て……考えが改まったんですよ」

だから。

そう言っつてこっちに向き直つて真剣な表情で、絵里さんは深く頭を下げた。

「ありがとう、白」

そんな姿を見て、少し自分がもどかしかった。

そして、私も全てを話した。

時々、嗚咽が混じっていた気がする。

けれど、絵里さんは笑わずにそっと、抱き寄せていてくれた。

.....

その夜。

音橋絵里も、音橋レイも、佐藤美穂も、里井真由子も。

全員が何も言わずに帰っていった。

ただ、誰もが言う。

絵里は笑って帰っていったと。

そんな気がする、それだけを言って。

別れ（後書き）

まだ少し続きます。

もう少しお付き合い下さい。

白の過去

私には生まれたとき妖力、つまり妖怪としての力がありませんでした。確かに妖兽である母の血を継いでいたはずですが、母が生きている間についぞ、妖怪、としての力が目覚めることはありませんでした。

そんな私にも母は妖術の使い方を教えてくれましたが、使うことはいないだろうと思っていました。使い方がわかって、使うための妖力がないのですから。

‘妖怪’として生きられなかった私は父と共に暮らす内、必然的に‘人間’らしくなっていました。とは言え、小さいころから妖怪とかかわってはいましたし、妖怪の山という特殊な場所に住んでいたため妖怪を畏れたことはありませんでした。

この山の脅威ともいうべき天狗とは、母を通じて小さいころから仲も良かったのです。だから‘人間’の子でも天狗たちは私を山から追い出そうとはしませんでした。

ただ、当時の私は失念していたのです。天狗が、余所者に対してはとことん排他的であることに。

母が亡くなったあとも、父は山を出ることをしませんでした。元々外来人である父は里に知り合いなどいません。少数ながらも顔馴

染みのいる山のほうが暮らしやすかったのでしょうか。

また、里に行くとなると私の処遇も決めなければなりません。里人は妖怪を恐れています。いくら半分人間とは言え、私が歓迎されることは有り得ません。好奇や嫌悪の目でみられることは容易に想像が付きまします。父は、それを恐れて山に留まることを選択したのです。

私も私で人間の知り合いなど父しかおらず、嫌悪こそ抱いていなかったものの、人間に対してそこまでの好意も持っていませんでした。どうでもいい存在だったのです。

加えて、まだ幼かった私は母を失い、精神的に不安定になっていました。思い返すと、その辺りは父に依存して過ごす毎日です。何をすることも、何処へ行くにも父と一緒にでした。

しかし父はそれに不安を感じました。このままでは自立が出来ず、一人では何も出来ない子供になってしまう、と。

だから父は私と距離を取り始めました。こう言うと大袈裟に聞こえますが、実際は食料調達の間の留守番などの、至って普通のことです。しかしそれすらも、当時の私には困難なことだったのです。

しかし一ヶ月もそうしていれば、私の依存も徐々に影を潜めていききました。それでも世間ではファザコンと言われる部類に入っていたとは思いますが、四六時中べったりと付き纏うことはなくなりました。

山で天狗と遊んだり狼たちと戯れたり、着実に立ち直りの道を歩んでいたのです。

あの日が、訪れるまでは。

*

「お父さん、どこに行くの？」

「ちよつと食料を取ってくるよ。もうすぐ尽きてしまいそうだし、冬支度は早めにと行ってね」

「私も行く。手伝う」

父は少し考えたあと、笑って頷きました。

季節は秋、穰子様と静葉様のおかげか、たくさんの作物が生え、美しい彩りが山を覆っていました。

手早く用意を済ませ、私と父は連れ立って獣道を歩きます。山にはたくさん食べられる野草があります。父はそういった野草を取るのが得意でした。

また、このとき既に私は狼の群れに入っていました。適切な言葉が見当たりませんが、ボスと言う立場ではなく、四六時中一緒にいるメンバーでもない……言ってしまうえば、今と大して変わりませんね。

なのでそれを生かし私は肉を、父は野菜を採取するため別行動をとることにしました。二時間後くらいに再びここで落ち合う約束を交わし、手を振りながら父と別れました。

おかしいと思い始めたのは、約束の時間が過ぎてからでした。正確な時間は分かりませんが、ずっと山で暮らしていると影の向きなどから予測がつくものです。凡そおおよそ三十分くらいが過ぎても、父は私のもとに現れません。

不思議に思った私は、父を探すことにしました。狼たちにも手伝ってもらい、父が行きそうな場所を巡りました。そして、人気どころか妖怪気も動物気もない場所に、父はいました。また、私とよく遊んでいた天狗の姿もありました。

私はここでも不思議に思いました。母や私と天狗は仲が良かったのですが、父は人間だからかそこまで好かれてはいなかったのです。その二人がなぜ、と思いましたが、特に深読みもせず彼らへ近づいて行きました。

「白、来るな！」

「お父……さん？」

近寄る私に気付いた父が叫んだのと、爆風が起きたのはほぼ同時でした。何が起きたか分かりませんでした。しかし必死な父の叫びに、ただ事ではないことを理解しました。

猛風に煽られて折れた木々や石つぶが私の体に当たり、血まみれになりました。当時の私の身体は人間の子供です。暴風に巻き込まれ無事であるなど、有る得るはずがありません。幾度も襲ってくる耐えがたい痛みにも、私は強く目を閉じよう願いました。

『死にたくない』

*

暴風は、いつの間にか止んでいました。ふと気づけば、私には耳と尻尾が生えていました。そしてその尻尾には、血がべっとりと付

いていました。鋭くなった嗅覚に、生臭いような、鉄臭いような臭いが飛び込んできます。

私の血ではありません。私の体は確かに血に塗まみれていましたが、自分の血が尻尾につく道理はありません。

では誰の血か、という疑問はすぐに氷解しました。それとは対照的に、私の心は凍てついていきました。私は此处で起きたことを瞬時に理解したのです。

足下に、首と胴体が切り離された天狗と、全身に切り刻まれたような傷がある父の死体がありました。どちらも、私がやったのです。尻尾にこびり付いている血が何よりの証でした。

呆然としている私のもとに、鴉天狗がやって来ました。その鴉天狗はこの惨状を見、それから私を見ました。そこで何かを言われた気もするのですが、如何せんその時の私は何か信じられぬものを見るようなそれでしたから、耳には入ってきませんでした。

近寄ってくる鴉天狗に、私は微動だにしませんでした。天狗は種族間の結束が固い妖怪です。この場を見れば、私に襲いかかってくるのは目に見えていました。私は心の何処かで、それを望んでいたのかもしれない。

しかし、鴉天狗はそんな私を自分に血がつくのも構わず、抱きしめてくれました。私はその温もりの中で涙しました。

気づけば、天狗たちの住処にいました。どうやら気を失っていたらしいのです。

先の鴉天狗から連絡がいつていたらしく、何があったかを尋ねられることもありませんでした。

私はそこで、天魔様と色々なお話をしました。掻い摘むと、天狗を殺したにも拘らず、その罪を問わないから今まで通り山で暮らしていたとのことでした。無論、私はそれを断りました。天狗だけでなく、父も殺してしまった自責の念から、そんな待遇を良しと出来なかったからです。

しかし天魔様は頑として譲りませんでした。どうやら、母に何かしらの恩があるようでした。母は母、私は私と言っても聞き入れてもらえず、結局押し切られてしまいました。

ただ、こう言われました。

「お前の力を野放しには出来ない。お前が寝ている間に尻尾に封印を施した。それを外さない限り、我々天狗はお前に手を出さない」

私は、これを当然だと思いました。天狗を倒せるほどの力を、それをコントロール出来ず、感情に流されるような子供に与えることは危険です。それくらいのは、当時の私でも理解できました。

その後私は仙人様に引き取られ、数年間を過ごしました。

*

「そうした紆余曲折の末、現在の私があるのです」

少し、真剣な表情を見せながら物思いに耽る絵里さん。暫くしてからその顔を上げて苦笑いをこぼした。

「……なかなか、と言ったところですね」

まず驚いた。

だって、その絵里さんの発した声にも、表情にも。同情なんて含まれていなくて、ただ優しさだけが詰まっていたから。

「私は……いえ、私の能力は、あなたにだけは通用しませんから」

苦笑いをこぼしてから、また外を見る絵里さん。

私達の会話は絵里さんの能力によって誰にも聞かれていることはない、先ほど聞いたばかりだった。

「だから、はい」

「え？」

ぼんぼんと自分の膝を叩く絵里さん。

「は？ え？ そこに乗れ、と？」

絵里さんの笑顔に負けて、私はそつと背中を預けた。重くないんだらうか……？

「まず……白はバカですね」

「なっ!？」

いきなり何を言い出すんだ、この人は。

「白はもう少し周りをよく見てください。見えますか？ 此处から」
「……………」

周りを、見てみた。

そこにはいつも通りにバカ騒ぎを起こしている皆の姿があって、不思議と笑顔になれた。

「あなたの周りには人が沢山います。果たして、白のお母さんとお父さんは今のあなたを見てどう思うんでしょうね？」
「それは」

恨んでいるに、決まっているじゃないですか。

そう告げると、ぺしっと頭を叩かれた。

「っ!？」

「本当にバカね、白」

「え、絵里……………さん？」

「振り向かない」

「は、はいっ!」

妙な威圧感に、私は振り返ることが出来なかった。

「親って言う物は、静かに見守る物よ。私はよく知ってるわ」

だから、何かしらね？ 分かるのよ。白のお母さんの気持ちも、お父さんの気持ちも。

きつと、今の白を見たら2人ともがっかりするわ。

だって今のあなたは前を見ずに、変えられない過去ばかり悔やんでいるから。

まるで、私のようね。

「絵里、さん……？」

「白は、私みたいになつては駄目な存在。あなたはみんなに必要とされているから……だから、戻つて。負_ツから、あちら側へ」

すつと、その白い指で指されたのは霊夢さん達。

賑やかな、正の地。あちじがわ

「それに、言ったでしょう？」

「あ……」

『白、私は誓います。この先何があろうとも、過去に何かあったとしても、私 音橋絵里は貴女を永遠に友とすることを』

『貴女は一人ではありません。私はずっと、白のことが大好きですよ』

……私はその時、感じたんだ。

絵里さんは、人の痛みを分かってくれる人だって。

「さあ……行って下さい、白。もう私の出番はありません」

「いえ、まだあります」

「へ？　　って、ちよつとー!？」

私は絵里さんの手を無理矢理引つ張っていく。

「どうして……私はもう……」

「私が！」

「？」

「私が！　絵里さんのことを必要としますからっ！」

その時笑った絵里さんの顔を、私は生涯忘れることは無いだろう。

そして、絵里さんはきつと、笑顔で帰っていったのだと私は思う。

白の過去（後書き）

大体は『独白』からの引用です。はい。

で。

学者だった両親と一緒に、言葉を覚えたときに一緒に議論出来たのがとても嬉しくて。だからそれだけを目指して頑張っていた。

けれど。

私はその時はまだ学んでいなかった。

人間というのは、珍しい物や自分より優れる物を貶める傾向がまれに見られる。

それは人間がそれをして楽しいと感じるからだ。人の心の痛みも知らないで。

自分が何者よりも勝っているのだと。優れているのだと自覚することだけのために、他人を貶める。

そんな人間だから、珍しい私を貶めることを決めたのだろう。

僅か8歳の頃。

私は特待生として既に大学に招かれていた。

此処でまた新たな知識を身につけられるのだと喜びを感じ、また同時に此処でも行われるであろうその行いに恐怖を感じていた。

毎日生傷が絶えなかった。

酷いときは1ヶ月で机が2個も駄目になってしまったし、鞆なんて15個も駄目になった。

何で、私だけ……

表向きに言えば、私とあの人達は仲良しなのだという。馬鹿馬鹿し

い。

本当は、私はあの人達の憂さ晴らしの為だけのただの道具なのに。

毎日毎日毎日毎日。

その悪夢は絶えることなく私を悩ませる。

何をすれば許されるのか、どうすれば私は幸せを手に入れることが出来るのか。

唯一私がすることは、両親にばれないようにすること。

転んだとだけ言えば傷は誤魔化せる。

ただ涙だけは誤魔化せないのだから、私は家の近くにある公園で1人ぐしぐしと泣いていた。

顔をしか顰めて、声をひそめて、ただめそめそと。

私1人だけが絶えればいいんだ。

そうすれば、お母さんにもお父さんにもお婆ちゃんにもお爺ちゃんにも、迷惑をかけなくて済む。

どうせなら、こんな知能はくれてやる。

それで平穩が。幸せが。幸福が。平和が。手に入れられるというのなら、私はそれを拒まない。

私は神様を信じない。
だって、神様がいるのなら私みたいに苦しんでいる人を助けないはずがないのだから。
いつも人の形を取ってにこにこ笑っている神様の像を見ては吐き気がする。
そんなににこにこ笑えるなら私と替わってよ。

「何してるの？」

「っ」

不意にかけられた声に、私はばつと振り返った。

茶髪につり目といったインパクトのある顔。でも何処か温かい雰囲気のある、私と同じ年っぽい女の子。

「泣いてるの？ 何処か痛いなの？」

「う、ううん……大丈夫……」

「そう？ なら良いけど」

何だろう、この人。

「私は長里友利。あなたは？」

「さ、佐藤、沙織……」

「沙織ね。私の事はトモで良いよ！」

不思議な子だった。

今まで私に関わる人なんて、全くと言っていいほどにいなかったから。

「ね、友達になるっ」

その日から、私の生活は一変した。

大学を卒業した後、また新たにトモちゃんと同じ学校に通い始めた。
唯一無二の親友。

トモちゃんの御陰で沢山の友達が出来たし、今まで恨んでいた世界に始めて色がついた気がした。

そして人生2度目の大学。

でも、あの時。あの場所で。私は

それは一瞬の出来事だった。

愛読書の“バカとテストと召喚獣”を買った帰りの出来事。

公園にさしかかる道。

そこは国道沿いの公園で、利用している人も多い。
しかし、今の午後5時という時間帯だと子供達も家路につき、公園には僅かに数えられるほどの子供がいるだけだった。

不意に、視界の端にボールが映った。

「？」

顔を上げて前を見る。

ボールがトントンとアスファルトに当たって跳ね返る。

ボールを追う女の子。

信号無視のバカトラック。運転手は夢の中。

荷物を放り投げてただひたすらに走る。

道路に残ったのは、私とトラックだけ。

ああ……名前も知らない女の子の為に死んじゃうのか。

ちょっと、泣かないでよ……助けた意味ない。

ほら、泣かないで、今度はもう馬鹿な事しないでね。

だつてさ。

ドンッ！！

鈍い衝撃と鋭い痛みが全身を走る。

薄れていく意識の中で、私はすごく余計なことを考えていた。

だつて、私みたいなバカがあなたみたいな子を助けちゃうから。

意識はそこで途絶えた。

暇つぶし。全ては神様の気紛れで、悪戯。

私は運命なんて信じないし、神様も信じない。

泡沫の幸せだった。

本当にあつという間の人生。

けれど昔。私はこの人生がいつか崩れることを願っていた。
だから私は前に進むことが出来ない、過去に囚われたままの愚かな
愚者だったのだ。

光の門が、眩しく光る。

だけど1度だけ、神に感謝してやっても良いのかも知れない。

気紛れでかける言葉。

そして、門を潜る。

愚かな愚者から、勇氣ある者へ。

しかし。

私は未だに勇氣ある者へ変わっていない。変わることが出来ていな
い。

だから過去を振り返って、悔やんで、そして決断できずにいる。

もう私は壊れているのかも知れません。

馬鹿な言葉を紡いで、私はあの幼き日の神を呪っていた自分と、今
目の前にいる少女に声をかけた。

ありがとう、白。

きっと私はこれからも後悔して、生きていく。
それは多分、ずっと死ぬまで続いていく。

前世の辛い記憶も、温かい記憶も、今の記憶も。
受け入れてやる。

0に居た私は、今こうして1に立っている。

十数年間、この世界で過ごした。

20年間程、前の世界で過ごした。

……私は、どちらの世界が良いのだろうか？

元の世界？
今の世界？

今を過ごす私に選ぶ権利はないかもしれないけれど、

いずれ悩む日が来る。

私はその時、どちらを選ぶのだろうか……？

どんな問題を解けても、

この問題だけは解けない。

正しい答えは、あるのだろうか？

私は、どちらを選べばいいのだろうか？

でも

今はただ生きていけばいい。

考えずに、ただひたむきにひたすらに。

私は私の道を歩こう。

いずれ選択をしなければ行けないときが来るかもしれないけれど、

『今』を歩いていけば良い。

いずれ、答えが見つかるはずだから、

あなたの気紛れの御陰で、また。新しい仲間ができたのかも知れな
いから。

絵里の過去 沙織の過去（後書き）

次はいよいよLigerさんのハーレム話いきまーす

恋愛“遍歴”

「絵里さんって、向こうの世界でもモテてそうですね」

「向こうというと、私の世界ですか？ いえ、そんな事ある訳ないじゃないですか。それに、前提条件がおかしいですよ？」

今の言い方だと、まるで私が幻想郷で人気があるみたいじゃないですか。

目の前の人、音橋絵里さんは苦笑しながらそう言った。うん、駄目だこの人鈍感すぎるね。

「何か失礼なことを考えてませんか？」

「滅相もない。本当のことですし」

「？」

疑問符を浮かべて私を見つめてくる絵里さんは、間違いなくそういうことに疎いだろう。

「というか、それを言うなら白のほうでしょう？」

「私ですか？」

「はい。かなり人気があるじゃないですか。いつも周囲に誰かがいますし」

「……確かに何かと構ってもらっていますが、それは私が物珍しいからでしょう。暫くすれば飽きるでしょうし、そこに恋愛感情など

ある筈がありません」

「白も大概アレですよね」

「アレってなんですか!？」

酷く心外なことを思われた気がする。少なくとも絵里さんに言われるのは納得できないようなことを。

「鈍感ですね、白は」

「だから絵里さんに言われたくないですってば」

「傍目八目。当事者よりも傍観者のほうが客観的に判断できるものよ。私からしたら貴方達はどっちもどっちね」

「……いい加減、無断で人の家に来るのをやめて頂けませんか、紫さん」

「こんにちは、紫さん」

「ええ、こんにちは」

「どうしてそんな普通に挨拶を交わすんですか」

人の家を何だと思っているんだろうか、この二人は。

「絵里ー、白が挨拶を返してくれないわ」

「駄目ですよ、白。挨拶は心のオアシスとも言われていて」

「だからなんでそんなに仲いいんですか!？」

絵里さんの適応力が高いのだろうか。普通の人は紫さんを苦手とするというのに。

「まあ、そんな事より。中々に面白そうな話をしてたわね」

そんな事で済むならネチネチ言わないでほしい。

「面白い？」

「所謂恋バナってやつね。やっぱり年頃の女の子が集まるとね。」

恋バナ……？ そのままの解釈だと恋の話だ。外の世界だとそんな略し方をするのか。大して略せてない気もするけど。

それはそれとしても、今はそう言う話の類だったのだろうか。何かが違う気がする。

「うー、ん……」

絵里さんも同じ疑問を持ったようだ。何というか、語感からしてもっとキヤイキヤイした空気にならないといけない気がする。

「私も交ぜなさいよ。こういう楽しそうなことなら」

「紫さんがそういう話をしたいんですか？ 意外ですね……」

「白、失礼ですよ。紫さんだって女性なんですから、大恋愛の一つや二つくらいあるでしょう」

「それに『女の子』の定番じゃない」

私は何も突っ込まない。怪我したくないから。

「それで？ 絵里はどうなの？」

「ど、どうって何がですか？」

「許嫁がいるんでしょう？」

紫さんは本当にそういう話を振ってきた。矛先は絵里さんらしく、本人は戸惑っているのか恥ずかしいのか頬を赤く染めている。可愛い。

まあ、私にはそういった話なんてないから安心して聞き役に

「そ、そうだ！ 白は誰か好きな人はいないんですか!？」
「裏切り者っ！」

自分が助かるために私を売りましたね!？」

「あ、それ私も気になるわ」

あああ、紫さんが予想外に喰いついてきてるし。完全に話の流れは私向きじゃないか。

「い、いません」

「まあ、私の胸一つに収めておきたい所だけど……」

「人の話を聞いて!？」

ニッコリと、端から見れば綺麗な、知っている人が見れば背筋がゾクツとする笑みを浮かべている紫さん。嫌な予感が……。

「そもいかないのが辛いところね」

「何を……」

「言っつて!？」

私と絵里さんが殆ど同時に口を開いた瞬間、スキマに飲まれた。

「さあて、たまった洗濯物を洗わないと。帰ろう帰ろう」

「手伝いますよ、白」

「二人とも、ここから逃げられると思っつているの?？」

「「お願い見逃して！」」
「うふふ、貴方達が悪いのよ？」

そう私達の前に立ち塞がって言うのは西行寺幽々子さん。その含み笑いが怖いです。

「何時までものらりくらりと私達から逃げるから」
「ちよつと実力行使をね」

絵里さんの肩を掴んで言うのは十六夜咲夜さんとレミリア・スカレットさん。力強くやられているのか、絵里さんの肩が外れそう
だ。

「今日は逃げられないわよ」

私の頭を鷲掴んで言うのは博麗霊夢さん。なぜ頭を掴んでいるのか小一時間問い詰めたい所だ。

「別に逃げても構わないけど、相応の覚悟をお願いね？」

最後に私達を拉致した張本人、八雲紫さん。この人に関しては小一時間どころか人権について終日腰を据えて話し合いたいと思っている。知識量やら何やらの差で良いとこ十分が限界なのが悔しい。

「本人抜きで話を進めないでください！」

「一体何の話なんですか!？」

「さつきまで貴方達がしていたことよ」

先刻？ ええと、好きな人を訊かれ

ダツ（私が身を翻す音）

メキツ（しかし失敗し、霊夢さんに頭を強く掴まれた音）
ナデナデ（幽々子さんが痛む所を撫でてくれた音）

「痛いけどっ……嬉しい……！」

「は、白、大丈夫ですか？」

「そういう絵里さんも……」

咲夜さんに肘関節を極められているじゃないですか。

「私の能力をしても逃げられないなんて……」

「逃がさないって言ったでしょう？」

「何この待遇の差……」

どうして私だけ多大なダメージを受けなければならないのだろうか。いや、絵里さんが怪我すればいいとかそういうのではなく、私をもっと労ってのな。

「拗ねないの。ほら、痛い痛い飛んでいけ」

「幽々子さーん……」

霊夢さんの手から逃れ、幽々子さんに抱きつく。もうどうにでもなれ。

「あの、白。むしろこの体勢かなり辛いですよ。いつやられるか分からない恐怖と、逃げ出せないという二重の苦しみで」

「あら、じゃあ一思いにやってあげましょうか？」

「ご免なさい」

絵里さんは絵里さんで大変なようだ。

「さあ、じゃれ合うのはそれくらいにして。楽しい暴露会の始まりよ」

瞬間、私達に冷や汗が流れた。

絵里 side

人はなぜ誰かを好きになるのだろう。子孫を残す為だけならそこに愛は必要ない筈なのに、人は人を愛さずにはいられない。恋に煩って自ら命を断つ者もいるくらいだ、この感情は相当深く人間に刻み込まれていると判断できる。

そして、ここで一つの仮説も浮かび上がる。人間でそうなら、その恐怖 言い換えれば人の思念から生まれた妖怪は、より精神的な繋がりを求めるのではないだろうか、という仮説が。

「 って、そんな事で納得できませんよ! 」

「 い、いきなりどうしたんですか? 」

「 白! 貴女はこの状況を見て何とも思わないんですか! ? 」

「 この状況と言いますと…… 」

言葉と同時に、白は視線を周囲に動かす。その動きについつい私もつられてしまいます。

「 絵里さんが咲夜さんに、私が霊夢さんに腕を掴まれている体勢のことですか? 」

「白、これはそういう可愛いものではありません。これは拘束というのです」

咲夜さん、掴まれている方の腕が鬱血したのか変色してきているんですが……明久の二の舞にはなりたくないです。

「でも絵里さん、これは私達に必要な以上に恐怖心を与えないための心遣いですよ？」

「というと？」

「妖怪にやられる方がやっぱり怖いじゃないですか。その点、二人は人間なので安心しません？」

「本音は？」

「狼に変化すれば万事解決なので余裕こいてま　れ、霊夢さん？ 私の尻尾は座布団じゃないですよって痛ぁ！？」

通常、動物の尻尾には神経も骨もありますからね。遠慮無くドカツと座られたらそれは痛いでしょう。場合によっては折れるかもしれません。私一人にこの人たちの相手をさせようとした罰です。

「そうなのよねえ。白の能力ってこういう時に厄介極まりないわね」

「えーと……動物と会話出来るとか、相手の能力を無効化するとか何とかでしたっけ？」

「そうよ」

「何が厄介なんですか？」

隣にいるレミリアさんにそう訊ねます。そもそも能力を無効化するという定義自体が曖昧ですよ。

「狼に変化されたら手も足も出なくなるでしょ？ こっちが強固な態度を取れば取るほど白も意地になるし」

「普通だったら私が境界を弄ればいいのよ。そんなこと出来なくなるから」

「あ、紫さん」

上半身だけが私の目の前に現れます。こついう時に、彼女は人間とは違う生き物だと認識させられますね。

「紫さんの能力も効かないんですか？」

「効かないのよ。あの子は自分に関わらないで欲しがっていたから、自分に干渉されるのが嫌いな」

「？」

「つまりね、白の能力は相手の能力の『無効』というより『拒絶』。相手によって自分が変わらないための自己防衛策の一つなのよ」

「??？」

言っている意味がよく分からず首を傾げていると、「まあ、これはあの子の問題だから」と話を打ち切られてしまいました。うーん、後で白に直接訊いてみますか。

「だから正直、白にはそんなに期待してないのよ」

「き、期待、ですか。私にそれをかけられても……」

「いいえ、十分に応えられるわ。だって」

いつの間にか、周囲に数多の人や妖怪が集まっています。あ、あれ？　なんだかさつきよりも人が増えてません？

「……絵里の恋愛遍歴を語って貰うだけだから」

「は、はは……人の恋路に首を突っ込むなんて無粋な……」

ひどくキラキラした笑顔をしている人たちに、私は恐怖だけしか

感じられませんでした。

……白、なんで既に狼化してるんですか。後で覚えておきなさい
……！

「おおぅ……ここまで根掘り葉掘り聞かれるなんて……」

随分強引に色々聞き出されました。黙秘権を使おうとすればリアルな死をチラつかせてきて、正直に答えたら答えただで暴徒化する人もいましたし……。

というかつう……深い所まで聞きすぎですよ。もうお嫁に行けない……。

「その龍夜って奴は完璧に惚れてるわね」

「明久つてのも怪しくない？」

「あとは女性陣ね。話を聞く限りじゃ、こつちに来てても生き残れそうなのがするわ」

「必殺料理人はあの薬師すらも倒したらしいわよ」
「何ですって！」

皆さんが何か騒いでいる気がしますが、全く耳に入って来ません。それほどまでに私のショックは大きいのです……。

「あああ……私が何をしたと　　うん？」

俯せになって自らの悲運を嘆いていると、首筋に生温い感覚。のそりと起き上がって見てみると、それは狼化した白の舌でした。

「……慰めているつもりですか。貴女がいたら私への口撃も半減していたのに」

皮肉を込めてそう言います。すると白は申し訳なさそうな表情をしてみました。……たぶん。

「全く、どうして貴女には能力が通用しないんでしょうね。通用したら色々と秘密も聞けるのですが」

溜め息を零しながら白を撫でる。ふわふわとした体毛の感覚に耐え切れず、つついっ体を埋めてしまいます。もふもふサイコーです。まあ、白も嫌がる素振りを見せないのも別に構わないでしょう。これくらいはして貰わないと割りに合いません。

「……………白？」

そこでふと、気付きました。白が体を震わせていることに。寒さだとかそんなのから来るものではなく、これは 恐怖からくるもの。

心配かけまいと必死に冷静に努めようとする白を見て、私は自分の考えを改めました。この子は、 白は、恋愛遍歴を訊かれることが嫌なのではない。それに伴った過去を詮索されることが嫌なのだ、と。もしも能力とやらが個人の在り方に起因するものなら、紫さんが『無効化』ではなく『拒絶』と言ったことにも頷ける。

「全くもう……そうやって背伸びするから、あの人達も貴女に構いたくなっちゃうんですよ」

私の呟きに反応して、顔をこちらに向けてくる白。おそらくこの

子には……いえ、この子にも。私と同じように壮絶な過去があるのでしょうか。むしろ年齢的にも土地的にも、白のほうが生々しそうな気がします。あの可愛い笑顔の裏で、この子は何を思っているのでしょうか。

私は白について殆ど何も知りません。だけど、出来ることはあります。

「白、私は誓います。この先何があろうとも、過去に何かあったとしても、私　音橋絵里は貴女を永遠に友とすることを」

「！」
「貴女は一人ではありません。私はずっと、　白のことが大好きですよ」

安心させるように、説き聞かせるように言い切る。

少しの間、白は何か考えるように沈黙をしていましたが、やがて何かを決意したかのようにいつもの妖獣型の姿に戻り、口を開いた。

「私も誓います。これから先、どれだけの月日が経とうとも、決して絵里さんのことは忘れません」

……嬉しい事を言ってくれますね。

White

『恋愛などしたこともなければ、する予定もない』

最初はそう言って、のらりくらりと周囲を煙に巻こうと思っていた

た。だけどやめた。恋愛『遍歴』というくらいだ、過去の詮索も入るだろうと思っただから。

私には他人においそれと話せる過去はない。父と友人をこの手にかけて、廃人同様に過ごしてきたのが私の大半の人生を占めている。だから絵里さんには申し訳なく思いつつも、私は早々に話の場から離脱した。

矢継ぎ早に繰り出される質問に答えきった絵里さんは、ひどく疲れているようだった。当たり前といえば当たり前だけど。労う意味で私が絵里さんの首筋を舐め上げると、恨みがましい目で睨んで来た。でも疲れか羞恥からか、涙目だったので怖くはなかった。

私に体を預けて、絵里さんは私に紫さんたちの能力が効かないことを悔しそうに呟いた。それを聞いた時、つい想像してしまった。『もしも私に能力を遮断する力がなかったら』と。

怖かった。そうなっていたら私の過去など隠せない。全部知られる。嫌われてしまう。想像だというのに、身体の震えを抑えることが出来なかった。

でもその時、絵里さんは言った。

『白、私は誓います。この先何があるとも、過去に何かあったとしても、私　音橋絵里は貴女を永遠に友とすることを』
『貴女は一人ではありません。私はずっと、　白のことが大好きですよ』

嬉しくもあつたけど、疑いもあつた。本当に私の半生を話しても嫌われないのかな、と。けど、その疑いはすぐに消えた。この人は、絵里さんは人の痛みを解ってくれる人だと感じたから。

いつか、話そう。帰ってしまうその時までには、私の事を。

そう決心した。それを伝えたくて私は元の姿に戻る。

「私も誓います。これから先、どれだけの月日が経とうとも、決して絵里さんのことは忘れません」

でも、失念していたことがあった。私は今、睨むだけで人を倒せるような人妖の真っ只中にいたんだった。

絵里 side

「美しい友情ね。感動したわ」

「にぎやああ!? 霊夢さん、頭が! 頭がメシメシ言ってる!」

「だから、その友情パワーで白も言っちゃいましょうね」

「腕があ!?! 私の右腕はそっちに曲がらなっ……!」

白って、明久や秀吉、雄二達を彷彿とさせますよね。案外、会ったら気が合うんじゃないでしょうか。

「絵里も気になるわよね? 白の好きな人」

「そうですね。過去は気になりませんが、現在の気になります」

咲夜さんに話を振られますが、過去には触れられないように釘を差しておきます。でも、今の恋愛事情くらい訊いても罰は当たりま

せんよね。

「ほら、皆気になってるんだから言いなさい？」

「う……い、いな」

「因みに、いなかったは禁止ね。それなら恋愛感情にかかわらず、今一番好きな人を挙げなさい」

「鬼だ……！」

涙目になりながら、白は誰を挙げるべきかで迷っているようです。ふふ、私の苦しみを感じなさい！

そうこうしている内に腹が決まったのか、白は静かに言いました。

「私は」

途端にざわめきがなくなり、霊夢さんが白の頭を抑えつけてメキメキさせている音しか聞こえなくなります。……どうしてそこまで執拗にアイアンクローをしているんでしょうか。まるで積もりに積もった欲求を肉体言語で表しているみたいです。

「絵里さんが、好きですっ！」

成る程、白は私のことが好き　　ってごっつっ！？　　な、ななな何を言い出すんですか！

「……絵里と白、ね」

「どこの馬の骨とも分からない輩に取られるよりは……」

「むしろ二人を奪えばいい話だし」

「手間が省けたと思えば……」

ヤバイ。何か本当に悪寒がしてきました。

「は、白！ 逃げますよ！」

「ええ！？ どうしてですか！？」

「この充滿している邪なオーラが分からないんですか！」

「分かりませんよ！」

ええい、ここで問答している暇はない！ こうなったら瞬間移動です！

こうして私たちの貞操を賭けた鬼ごっこが始まるのだが……それはまた別のお話。

恋愛“遍歴”（後書き）

次回もハーレム話の予定？

始動！ パーティーと鬼ごっこ！？

幻想郷に来て、もう1人妹が出来たような気分だった。

妹というのも、あまり適切な表現ではないような気がするけれど。

「白、隠れて下さい」

「え？ いきなりなんですか？ 絵里さん」

この子は私と違って良くモテる。とどのつまり、人気がありすぎて困っているのだ。

その癖自分は鈍いという最悪の特性を持ち合わせているという、見ているこっちが「あああ」と思ってしまうほどの鈍さなので、本当に紫さん達が可哀想になってくる。

だけど、逃げたい気持ちは特によく分かるのでたまに手助けしてしまおう。

「文さんが来ますよ。恐らく宴会にでも誘うのではないんですか？」
「隠れます」

素直でよろしい。

そう呟いて私は緑茶を入れる。

「白ー！ 絵里さんー！ お邪魔しますねー！」

「いらっしやい、文さん」

「あれ？ 白はいないんですか？」

「はい。今は買い物に頼んでいます」

「あやや。残念ですね……」

そう言いながらも、笑いながらどかどか入り込んでくる文さんに、私はお茶を出すことにした。

白 s i d e

.

「粗茶ですが」

「これはどうも」

普通通りに文さんに接する絵里さん。

やっぱり絵里さんの適応力は並じゃないようだった。流石紫さんを手懐けただけはある。

「所で今日はどういったご用件で？」

「あ、そうでしたね。実は今度パーティーが開かれることになりました」

「パーティー、ですか？ それはまた随分と大規模な物を……」

「そこでお2人に招待状を配りに来たんですよ」

「ごそごそと封筒らしき物を取り出して絵里さんに渡す文さん。

これなら隠れる必要とか無かったんじゃないかな……？」

「ありがとうございます。因みに白がいたらどうするつもりだった

「んですか？」

「いえ、盗撮を少し」

隠れていて良かった。

「そうですか……まあ構いませんが」

構って下さい！？ 何をサラッと酷いことを平然と言っているんですか！？」

……驚きすぎて言葉が変になった……

「それじゃあ、必ず来て下さいねー！」

そう言って出て行った文さんを確認してから、隠れていた場所から抜け出す。

「ご苦労様です」

「絵里さん、教えて下さってありがとうございます」

「いえいえ」

「所でその持っている黒い物は……？」

「文さんのカメラのネガです。私も何故か盗撮されていたので念のためにネガを処分しておきます」

「す、凄い……」

「そ、それほどでもないですよ……」

そう焦って言う絵里さん。

それにしてもさっき話していたパーティーって何なんだろう？

「絵里さん、招待状って……」

「え？ ああ、コレのことですね……読みますね」

「あ、はい」

「『絵里と白へ

今回我が紅魔館でパーティーを開くことになった事をお知らせ致します。

是非いらして下さいますよう、お願い申し上げます。

注意事項

出席者は必ずドレスアップして下さい。

和服は認めません。

尚、博麗霊夢氏は腋を出してきて下さい。

では、皆様の参加を心待ちにしております。

魔館一同』」

紅

……………どういう事だ。

「どうもパーティーに参加するには和服ではなくドレスで、ということなのでは？」

「行かないで、おきましようか」

「そうですね……………いくら何でも主催日が明日というのもありますし」「絵里さんが分かってくれる人で良かったです……………」

スカートとか、本当に死ねる。

「そう言えば絵里さんは大抵スカートとか穿いてますけど……………平気なんですか？」

「え？ ああ……………実はコレは母の意向でしてね。私も昔はスカートとかに抵抗が合ったんですけど、母に泣き頼みをして……………」

そう言いながらスカートの中身をばさつと見せる絵里さん。

………つて、ちょっと待ってッ!?!?!?

「な、なななな何をやってるんですか!？」

「大丈夫ですよ、白」

「何が大丈夫なんですか……」

「だって、中に短パン穿いてますから」

………え？

恐る恐る絵里さんの方を見てみると、捲れたスカートの中には黒い短めの短パンが装着されていた。まるで紅魔館で働いたときの私みたいだ。

「まあ、私達は行かないから関係ないですよね」

「ええ。全くです……それで白、本音は？」

「ドレスなんて物を着せられた上に危険な人物達のいるであろう巢窟に放り込まれたくないです」

「長い説明をありがとう。ただその意見には同意ですよ」

はあ、と短い溜息をついた後、私達は通常の生活に戻し、眠りについていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「迎えに来たわよ」

スキマを開いて開口一番。

そう言ったのは紫さんだった。

「迎えて……」

「パーティーの迎えよ。どうせあなた達のことだから逃げおおせよ
うとか考えていたんでしよう?」

「うぐ……」

「ほら、着るドレスとかもあっちで用意してるみたいよ?」

うぐ……もはや首を絞められて言っている……
どうやって切り抜ければ

「いえ、ドレスなら私が準備します!」

良いのだろうか……?

「って、何を言っむぐうっ!?!?」

「ですからご安心を」

「そう? じゃあ早めに着替えてらっしゃい」

「はいっ! さ、早く行きますよ、白」

「むううむむ?」

手で口を押さえられているためか真面目な返答が出来ずに私は別室
に連れて行かれた。

パタン……

「ぷはっ！」

「すいません、白……ですがよく考えてみて下さい。私達が今此処で控えめな物を着ないとあちらで派手な衣装を着させられるに決まっています」

「さあって！ 何を着ようかなっ！」

今日の私の理解力は半端じゃなかった。

とは言っても、ドレスなんて何を着ればいいのか……って

「絵里さん、何か慣れている手つきで次々と準備してますけど……慣れているんですか？」

「え？ ええ、まあ……一通りは覚えてますよ。パーティーには色々と出ましたから」

「やっぱりその時はドレスで、ですか？」

「いいえ、制服です」

いきなり頼りなくなった。

「む……安心して下さい。ドレスだって数着ほどなら持ってますよ。少々地味な物を」

「貸して頂けるんですか？」

「勿論です。それとも白だけみんなの着せ替え人形になるつもりですか？」

「なーにを着ようかなあ！」

絵里さんが床に広げたドレスを一着ずつ見ていく。

うーん……これでも地味な方、なのかな……凄い。

でも、コレとか本当に絵里さんに似合いそうだ。絵里さん基本的に

細かいし。

「白、こっちに来て脱いで下さい」

「え？ あ、はい」

絵里さんが1着のドレスを持って来る。

白いドレスで、青のアクセントがきいているシンプルなドレスだった。

「こ、コレを着るんですか？」

「白のです。はい、短パン」

「……………ありがとうございます」

短パンを装着した後、私は絵里さんに着付けられる。

髪型もなんだかお洒落な形になった。

「メイクは……………しなくて大丈夫そうですね。元が元ですし」

「へ、変じゃないですよね……………？」

「ええ。勿論ですよ」

絵里さんは超能力を駆使して黒いドレスを着ている。髪型はいつもの髪型とは違い、同じバレッタを使って少し工夫を凝らしているみたいだった。

中には勿論短パンを穿いていたけど。

「それじゃあ紫さんとご対面ですよ」

「う……………そう言えば紫さんも結構似合う衣装してましたよね……………」

「流石ですね。私では到底及びそうにありませんよ」

「私です」

はあ。

短い溜息をついて襖を開ける。

「あら、結構早かつ……………た？」

「お待たせしました、紫さん」

私達は声を揃えて言う。

紫さんといえば、目を見開いてこちらを嘗めるように見ていた。

「に、似合ってるわね」

「そうですか？」

「私としては自身がないんですけど……………」

流石スカート。殺傷能力は抜群だった。スーッスーするし。

「大丈夫よ。それじゃあ、行きましようか」

「って、まさか」

「また落と」

「2名様、ごあんなーい」

絵里 s i d e

-.
-

一瞬で変わる景色と、身体に伝わる鈍い痛みを感じながら、私は反射的に閉じてしまっていた目を開ける。

絵里さんが扉をそつと開けた、その時だった。

「確保オオオオツ！！！！！！！」

「っ！？ な、きゃあああっ！？！？！？」

いきなり飛び出してきて、絵里さんを確保した後直ぐさま意識を刈り取るという高等技術を繰り出したのは輝夜さんだった。

「って、何やってるんですか！？」

「賞品確保したわよ！！」

『『『『『『『『『『』』』』』』』』

大いに盛り上がりつつある会場を啞然として見渡す。

「い、一体コレは……」

「白、アンタ知らなかったの？」

私に声をかけてきたのは、紅白のドレスに身を包んだ霊夢さんだった。

腋をすっかりと露出しており、あの招待状に沿った恰好を律儀に示してきたらしい。

手にはケーキが載ったお皿を持っていた。

「な、何がなにやら……」

「絵里争奪戦。アンタの場合裏では和平交渉……とどのつまり、成人するまで誰も完璧に手は出せない事が決定しているわ」

「初耳ですね」

「みんなも穩便に済ませたかったのよ」

今まで1つたりとも“穩便”なんて事ありませんでしたよ……？

「だけど絵里はもうすぐで帰るでしょ？ だからその前に」

「あ、お別れパーティーみたいな物でも開くんですか？」

「誰かの物にしてしまおうという魂胆よ」

「全く持って明後日の方向に行きましたね……！！」

もつきゅもつきゅと呑気にケーキを口に運ぶ靈夢さんを横目に見ながら、絵里さんを探す。

「……いた……！」

ドレス姿のまま、前の方に置かれた立派な玉座に座らされている絵里さん。

その上から銀の鎖で拘束され、更には目隠しをされている。きっと当の本人はまだ暗い意識の中だろうか。抵抗を一切見せていない。

「さあて！ 賞品が来たところで改めて説明するわよ！」

レミリアさんがノリノリだ。

「まず、これから絵里を巡って争いを開始するわ。その争いの中で最後まで勝ち残った物が絵里を手に入れることが出来るわ」

うわぁお………凄い人権無視。

「では、勝負方法を言っつわよ?」

全員が息を呑んだ。

バカバカらしいが、私は私で参加するつもりだ。

勿論絵里さんが目当てとか、そう言っつ意味合いではなくて

「勝負方法は……………【鬼っつこ】よ!!!」

1人の友人として。

始動！ パーティーと鬼ごっこ！？（後書き）

反省はしている。後悔もしていると言えはしているのではないだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3990w/>

幻想郷の狼と馬鹿な世界の超能力者

2011年12月11日16時53分発行